女學

【毎月二回五日・廿日發行 明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可】

明治三十五年四月二十日發兌

第貳百五拾壹號

女鑑第貳百五拾壹號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御爲送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、二錢)一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に郵券送料御送附の事
○未納税の來翰は一切受取り申さゞる事

定價

一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一ヶ年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料

五號活字廿字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應す

明治三十五年四月十九日印刷
明治三十五年四月廿二日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊案一
東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人 並木貞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

四月十五日初號發兌

定價拾錢
郵税一錢

やまびこ

（五月五日第二號發兌）

聊かの主張なきにあらざれどもそは當來の實現に歸すべきなり、文藝雜誌『山彥』は新に生れて諸君に見えんとす

初號目次

發行所 東京神田佐久間町四ノ十六 白鳩社
大賣捌所 東京堂 上田屋



愛國婦人會長
岩倉公爵夫人



女子英和講習會長
柴田靜榮子刀自

常に教育に熱心し、同氏の學資を仰ぎて東京京都の二大學、高等學校、高等師範學校其他の學校に在るもの二十六名の多きに及べる由なるが、本年は同氏古稀の壽に當れば、子息孫三郎氏は、其祝賀として金一萬圓を倉敷町に寄附し、一個の財團を作りて、特に貧民のため奬學資金に供せんとする計畫ありといへり。

●篤志の生徒　香川縣香川郡弦打村大字鶴市御殿森與太郎(十三年)は、紫山高等小學校二學年生にて、性質温和品行學力共に善良なる上に、近來は學校より歸宅後は、近邊の兒童を伴ひ、山に行きて薪を採るに、おのれより年少にして多く採らざるものには、自分の採りしを足し、荷作りして歸らしめ、夜は其等の兒童を自家に集めて夜學をなし居たるが、同所と同じ村内にても、川を隔てたる山の麓にて、行路甚だ困難なるが故、雨の夜などは送り迎へする事もありとぞ。又祝祭日などには業を休み、川に出で丶運動をなすなど、學校の課程を勵むより、他の兒童も之に勵まされ、同所より就學せる兒童等は、一般に成績良く氣風大に改まれりと。まことに奇特のものといふべし。

●孝子　下谷區萬年町一丁目十三番地剝身賣渡邊金次郎(七十五年)の長男市五郎(三十一年)と云ふは、妻ヒサ(三十二年)と共に老年の父を扶養しつ丶、矢張り剝身を賣り歩き其賣上にて父への孝養怠りなき事は、近隣の者が絶えず評判する處なるが、金次郎は元淺草區藏前片町に住ひ、同人の父は藤吉とて、母は金次郎の生る丶間もなく死去したれば、藤吉の手一つにて生長し、十四五歳の時より剝身賣となり、早朝より深川蛤町にゆきて蛤を仕入れ剝身となして市中を賣り歩き孝養怠りなかりしより、時の町奉行より青銅五貫文を下賜されし事ありき。此の血脈を受けし市五郎なれば、其の父に孝養を怠らざるは遺傳とも云ふべく、妻も矢張り良人の行爲

に倣ひ、舅に孝養を盡し居れりとぞ。

●名所の櫻　上野清水堂の畔にありし彼の秋色櫻は去年枯れて、その俤を僅に根方に留めしは遺憾なれど、寒松院櫻こそは名に著き老樹なればまた春めきわたり、其他向島、靖國神社、日枝神社、紀尾井坂、小石川江戸川の畔、四つ谷見附外等の櫻は人も知る所ながら、多くは八重咲のものなればなほ早かるべし。小石川傳通院前元學寮内にある老樹の櫻は、都下第一の大樹といふべき者にて、嘗て徳川三代將軍の遺愛の櫻なるよし口碑に傳へられたるが、文化文政年代には文人墨客のこの學寮に於て盛んに詩歌の會を催し、明治維新後は大沼沈山翁など年々例會を此樹下に開きしとぞ。澁谷金王神社境内にある金王櫻はかの澁谷金王丸が手植の櫻と稱すれど、樹幹小にして同時代のものとも思はれざるが、花を賞するの外樹下に建てる文碑など觀て、昔時を追懷するも一興なるべく、こは澁谷停車場を去る僅かに二三丁の近距離の事とて、春暖の候、郊外散策を兼ぬるも興多



からん、近縣にては埼玉縣の大宮公園、同縣熊谷堤の櫻も近年客を迎ふる爲め掛茶屋等の便利もあれば、滊車を利用して一日の遊び場所には殊に妙

なり。又同縣鴻巣在浦の冠者の古跡なる浦櫻また老樹の有名なるもの、而かも八重咲なれば少し時後るべく、其他仲仙道は濱街沿道にては浦和在與野町の公園なる櫻花、近年又花見の人多し、川越町喜多院の奥庭に在る老樹は、東照公遺愛の櫻にて、天海僧正に賜りしものにて頗る名高し。且つ同院境内にはこの老樹のみならず、境内到る處に櫻樹多く近縣花見場所の一に數へられ居れる由。

●好學園女子寄宿舍の設置　帝國教育會の千田特次郎氏は近時都下の女學生中、親戚知己の家親に寄寓し、又は自炊等と稱し甚しきは下宿屋に起臥して女子に有まじき自儘の生活を營めるもの鮮からざるを憂ひ今般成瀨女子大學校長、巖本明治女學校長、三輪田女史、松村介石、島田三郎の諸氏の贊助により麴町三番町六十六番地に好學園と稱する家庭的の女塾を設け此等の女子を收容し諸學校に通學せしむる傍ら園内にありて家政的訓練を與へ且つ夜間教育兒童心理、實踐倫理家事衛生等に關する講話をなすとぞ。

●露國婦人の禁酒運動　露都聖彼得堡の婦人社會にては、亞爾個保兒含有飲料の需用日を追ふて盛んなるを憂ひ、之が矯正せん目的にて、一種の禁酒會を組織したる由なるが、會員は固より絕對の禁酒家にして、彼等は少しにても飲酒の嗜好ある男子とは一切交際せざることの規約を定めたりといふ

●空中航行電氣船　伊國農商務省官吏、フエロシは、此程電氣を用ゐて空中を航行する船を發明したりと。輕氣球の部分は、アルミニユムと絹布とを以て、船は全部アルミニユムを以て造りたるものにして、危急の場合には水上を航行し得る仕掛を有す、氏は已に英國及び獨逸に於て特許を得目下英國の資本家と交涉中なる由。

●英帝國內の國語の數●●●●●●●●●　英帝國內にて話さるゝ國語の種類は總て二百四種ありて、其內八十五種は亞細亞、五十八種は阿非利加、三十種は濠洲に屬すと云へり。

●マルコニの美德●●●●●●●　無線電信の發明者マルコニは、年齡僅に三十歲に過ぎず、然も此の如き偉大なる成功を爲したるのみならず、多くの電氣學の大家をして、自家の說を信ぜしめ得たるは、世人の驚嘆する所にして、氏の性格之をして然らしめたるなりと云ふ。英國の電氣學雜誌は記して曰く、マルコニの名世に知られてより已に五年を經過したれども、其間マルコニは曾て一回も豫じめ自身の計畫を告げたることなく、世人は常に其成功を聞き始めて、氏が如何なる計畫を爲しつゝありしかを知りたるなり。此事は世人が氏に大なる信用を與ふる所以にして氏がセゾトジヨンスより通信を爲し得たるとき、氏は此の性格なかりせば、何人も之を信ぜざりしならん。當時タムソン教授は、其成功を疑ひたる新聞記者の問に答へて「余はマルコニが之を爲したりと云はゞ、必ず之を成したるならんと信ずと云ひ、エヂソンも亦新聞記者に答へて「マルコニの性質を知らざりしならば、其言を疑ひたるやも知れず」と云へり、實に氏の成功は、氏の美德が與へたる適當なる賞品なりといふ。

●六萬の婦人選擧權を求む●●●●●●●　英國ランカシヤイアヨークシヤイア及びチエシアイアの工女六萬六千八百人は二月請願書を同國議會に提出し、工業上の生存競爭に身を委ね居る女子は、選擧權を得るに痛切の必要ありとし、女子に選擧權を與へられんことを要求したり、勞働者同盟は此請願に贊成し居り、議會が女子に選擧權を與ふるまでは、飽

迄之を議會に迫るべしといふ。

●清國西太后英語を學ぶ　清國西太后は近來英語の必要を感ぜられ、清國婦人にして英語を解するものを求め居られしが、此程元駐清獨國公使の妾たりしサイチユンヒユアと云ふを、英語教師に聘せられたりとぞ。

落葉籠

▲私は用文書で、なりたけ高尚の本を求めたいので御座りますがどなた様の著したのが宜しいか、皆様にお尋ね致します。（埼玉縣關口しづ子投）

▲東京慈恵病院の所在地と、同院に勤務して居らつしやいました鈴木菊子様の御住居を委しくおをしへ下さいまし、（田舍の某女投）

▲前號の家庭小説ひめもゝは誠に面白く讀みました、妾は女鑑が產れて此方の好小説と思ひます、



今後はどうぞ斯る面白いのばかりを願ひます。（大阪難波江女史投）

▲前號に見えました長門とき子さんの投書にかゝる方語の中で、他は何れも日本一般の俚諺で解りますが唯一つ「女の口が過ぎて牛の價がさがつた」といふ事は如何なる意味か解かりません、何卒御

敎示下さいまし、（水戸春日井のぶ子投）

▲越後は非常に奢侈な所でありますからその尋常師範學校では女學生の服裝風俗等の奢侈を嚴禁して、第一顏へ白粉を塗る事を禁じましたら、父兄がそんな學校へ娘を入れて置く事は出來ぬとて退校願を出した者が澤山あつたさうです、何と呆れた話ではございませんか、又女子が產れると金になるとて、お祝の餅を搗く處があるさうですが果してそんなでございますか、其方の御方へ御尋ね申します、（南海、磯子）

▲電話といふものは、相互の談話を交換手は聞く事が出來得るやうに造られて居るものですか、伺ひます、（京都文山とり女）

▲流行の花見小袖といふものを見て、東京の令孃といはれるお方々の贅澤には驚きました、妾等如き田舍少女には名さへ分らぬ物が澤山でございます女はそんなにお飾りしなくてはならぬものでございませうか、（弘前山本くめ女）

▲どうも世の中は奢侈に流れて困ります、東京は殊に致し方がございません成るべく質素にされたいものであります、（係記者）

▲妾の宅では毎日新聞を取つて居りますが、鑛毒地慘狀には誠に驚きました、政府は如何して棄て丶置きませう餘りあはれに感じましたから、日日の暮しを省いて少々の義捐を致しました、皆樣も日々のお小使錢を節儉なされて、彼等饑ゑに叫ぶ多くの同胞に、一握のお惠みを與へられては如何でございます、（横濱愛讀女子）

▲妾の父は嚴肅で新聞を見せません、そのかはり女鑑は見せます、御誌の發行は前に時々おくれましたが此頃はおくれませんで嬉しう存じます、（東京某女）

女鑑歌文月次兼題

四月廿日　歌　月前花　二月九日〆切
　　　　　文　菫の花を友に送る文

五月五日　歌　鏡　四月廿四日〆切
　　　　　文　薔薇の畝

五月廿日　歌　新樹　五月九日〆切
　　　　　文　出産を賀する文

懸賞

天には三冊（一月半分）　地には二冊（一月分）　人には一冊を贈呈す

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名
………………………
………………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名
……、……、……。……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なに人にても、随意に投稿するを得。

○兼題を天地人の三才に分つ

新刊發賣廣告

福羽美靜大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全一册
和裝美本
定價金參拾錢
郵稅金四錢

本書は上長德の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、淸少納言、相摸、阿佛尼、鵜殿よの子、弓屋しづ子、三島さや子、荷田蒼生子、西三條實條公後室、柏原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内荻子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粹を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、敎訓、論文の七門に分ち每章末に其の作法を詳解し尙難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之普く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる脩身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社　國光社

山崎忠和著　（彩色精版口繪並に揮毫入）

文久物語

一名寺田屋騷動

洋裝全壹冊
定價金貳拾八錢
郵稅金六錢

寺田屋騷動の名は維新史中の**悲劇**として世人之を知るも其眞事實に至つては今猶**秘密の間に伏在**せり此書當年の事蹟を記すること極めて精確にして**隱微を發き秘密を明にし**彼の奇傑田中河内が同志淸川八郎と僞錦旗の下に天下の大諸侯を翻弄したる機變百出の壯圖を始めとし其間島津久光西郷隆盛眞木和泉平野二郎等諸豪の活躍するあり正に是れ**維新史中の花**として**絕壯絕慘**を極むるの狀髣髴として目睹するが如くならん宜なり本書一度出でゝ世評の嘖々たるや試に都下新聞の批評を左に掲げて以て其一班を示さん

●●●●（東京日々）　浩瀚なる史料より其粹を拔き能く錯雜せる事實を明瞭に記載せり田中河内介淸川八郎等の浪士が倒幕の畫策を叙するに當時志士が往復したる書簡の字句を以て其問答を試みたる如き直に當時の志士に面して革命の大激論を聞くの感あり

●●●●（萬朝報）　著者山崎氏は十年間久邇宮邸に在り同前宮の事蹟調査の際其秘錄密記の中より本構維新胚胎の原素を咀嚼し終に此の物語を刊行するに至れり專ら寺田屋騷動を經となし傍ら當時の志士慷慨家の言行を緯とし世に知られざるの秘密を摘發したるもの少なからず（後略）

●●●●（讀賣新聞）　伏見寺田屋騷動の顚末を詳叙したるもの材料精確にして行文眞卒未だ世に現はれざる事蹟を擧げて當時の情狀を發揮したり云々

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社出版部

井上賴圀校訂　小澤政胤編著

慶長以來 國學家畧傳

洋裝全壹冊
八百五拾頁
總クロース美本
定價壹圓五拾錢
郵税十里以内七錢百里以内十二錢百里以外廿四錢

深く國學者の傳記を集めたる書は僅に微細なる古學小傳の類に過ぎず德川時代文學史の研究に不便少からざりしを著者小澤氏從來概して前後**十年間諸書を參照**し遂に本書を大成せられたり著者は尚之に滿足せずして略傳と名づけられたれど其實**今日に於ては最も完備した國學者の傳記**なり載する所は慶長以來明治二十八年までの有職故實家神道家語學者文人歌人等**五百四十名**名人の末には**其の著書目録**をあげかつ引用書目を明示したり或は之れを**國學者人名辭書**ともいふべくまた**列傳体國學史**とも稱すべし卷初にはイロハ分**索引**ありて搜索に便じ**國學傳結系譜**ありて各學者の學統を一目に見るべく**國學者年表**ありて一見各時代の學者を數ふべし殊に斯學の老大家**井上賴圀先生**は反覆叮嚀自ら**校訂**の勞を執られたれば其正確なること根據ある他書の比にあらず本書一たび出で丶國文學研究者は**暗夜に電燈**を得たるの思ひあらん

師範學校中學校高等女學校其他**各種の學校**に於ては無二の**參考用書**たるべく殊に**文部省檢定受驗者**は必ず一本を座右に備へざるべからず

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社出版部

肝付海軍少將題辭　木村海軍大尉校閲
小笠原海軍大佐序文及作歌　西圭一
伊東海軍大將手翰　野本衛佐美　合著

訂正第三版

新案

海軍遊戯法

菊版美本
詳圖入
全一冊

定價金貳拾錢
郵税金四錢

（一）日本は海國なり故に兒童の時より海軍思想を養成せざる可らず

（二）兒童は身体發達の旺盛なる時期なり故育に最も体に重きを措かざる可らず

（三）兒童は興味を感ずる事甚しきものなり故に機に應じて其快樂を正情に導かざる可らず

本書は右三者の目的を達する一助として著者が多年或は兵書に徵し或は海軍將校に質し許多の實驗幾多の考案を積みて裘葛を費し漸編成したるものあり、本書によりて以上の目的を養成せんか世上幾百萬の少年子弟精神忽ち活潑勇壯と化し國家一朝事あるに際しては巨艦に駕し怒濤を蹴り赫々の偉勳を建て優に海國の臣民たる名に負かざる事刮目企足して俟つべき也、世の教育家父兄諸士の猛省を促す、

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發賣元　株式會社國光社出版部

堀内新泉子著

家庭讀本

大和綴美本 全四冊 定價各拾六錢 郵税各四錢

目下淫猥なる小説の盛に行はるゝを憂て昨春以來専ら本書の著述に沈吟断腸せし堀内新泉子の家庭讀本は今や全部完結せり子が着想の如何に高潔多趣味にして其著筆の穏顯優雅なるかは既に讀者の熟知せらるゝ所なれば今又此に何をか云はん本書の世に出づるや近來の出版物中實に稀有なる世の賞讚を得たり家庭の讀本として學校の賞與品として續々購求の榮を賜はらんことを

全部四卷目次

横川同天護編 ●東宮御慶事の記 附皇孫御降誕の記 美本 定價金卅五錢 郵税金四錢

北村重敬著 ●土佐の長平漂流談 定價拾六錢 郵税四錢

◉發行所 東京市神田區小川町九番地 (電話本局二四二〇番) 開發社

山崎忠和君著

日露の英雄

●近刊豫告●

露國の彼得大帝と我朝の徳川齊昭島津齊彬とは其識見事業の世界的なる處同一なり其帝たり侯たり事功の成否の如きは別問題とすべし今此の三大英雄の性行經歴に就て細かに觀察すれば識慮の深遠なる意氣の雄偉なる機略の宏大なる未だ嘗て其の間に甚しき軒輊あるを見ず但其成功と否とは境遇に順逆ありしのみ之を以て三大英雄を輕重する如きは眞に皮相の見たりと言ふもの是れ本書の著者が立論の骨子なり著者烱犀の史眼を以て東西幾百卷の史傳を看破し以て此の書を爲す三大英雄の音容動作眼前に現れ出でゝ宛も活動寫眞を見るが如し目下既に印刷に着手したれば發刊の日は大方有爲の諸君一讀して萬古の心胸を開拓し一世の智勇を推倒するの志氣を養成せられんことを望む

●近刊豫告●

發兌元　東京橋區築地貳丁目（電話新橋二六九三）　國光社出版部

二八水は
肌を白くきめを
よくつやをだし
にきび●ひゞ●
肌のあれ●おし
ろい下に用ゐて
尤もよろし

又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり




花王石鹸

品質ノ善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シタル佳品ナリ

●賣捌所ハ全國到ル所ニアリ

發賣本舗

東京馬喰町二丁目　長瀬富郎　（特許電話浪花二九二二）


女鑑
明治三十五年四月二十日發兌
每月二回五日、廿日發行 明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可
第貳百五拾壹號

女鑑第貳百五拾壹號

目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御寄送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割増の事
○別に領收證を出さず若し強ひて領收證を要せらるゝ方は別に往復紙送料御送附の事
○未納稅の來書は一切受取り申さゞる事

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一ヶ年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年四月十九日印刷
明治三十五年四月廿一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊素一
印刷人 東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地 並木貞雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
發賣元 株式會社國光社出版部 (電話新橋二六九三番) (電話新橋特八八)

新刊發賣廣告

福羽美靜大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全一冊
和裝美本
定價金參拾錢
郵税金四錢

本書は上長徳の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鶴殿よの子、弓屋しづ子、三島さやた、荷田蒼生子、西三條實條公後室、竹原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内狭子等の傑作中に就き其の最も精を抜き粋を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、教訓、論文の七門に分ち毎章末に其の作法を詳解し尚難句古事の名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる脩身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社　國光社

四月十五日初號發兌

定價拾錢
郵税一錢

やまびこ

（五月五日第二號發兌）

聊かの主張なきにあらざれどもそは當來の實現に歸すべきなり、文藝雜誌『山彦』は新に生れて諸君に見えんとす

初號目次

發行所 東京神田佐久間町四ノ十六 白鳩社

大賣捌所 東京 東京堂 上田屋



愛國婦人會長
岩倉公爵夫人



女子英和講習會長
柴田靜榮子刀自



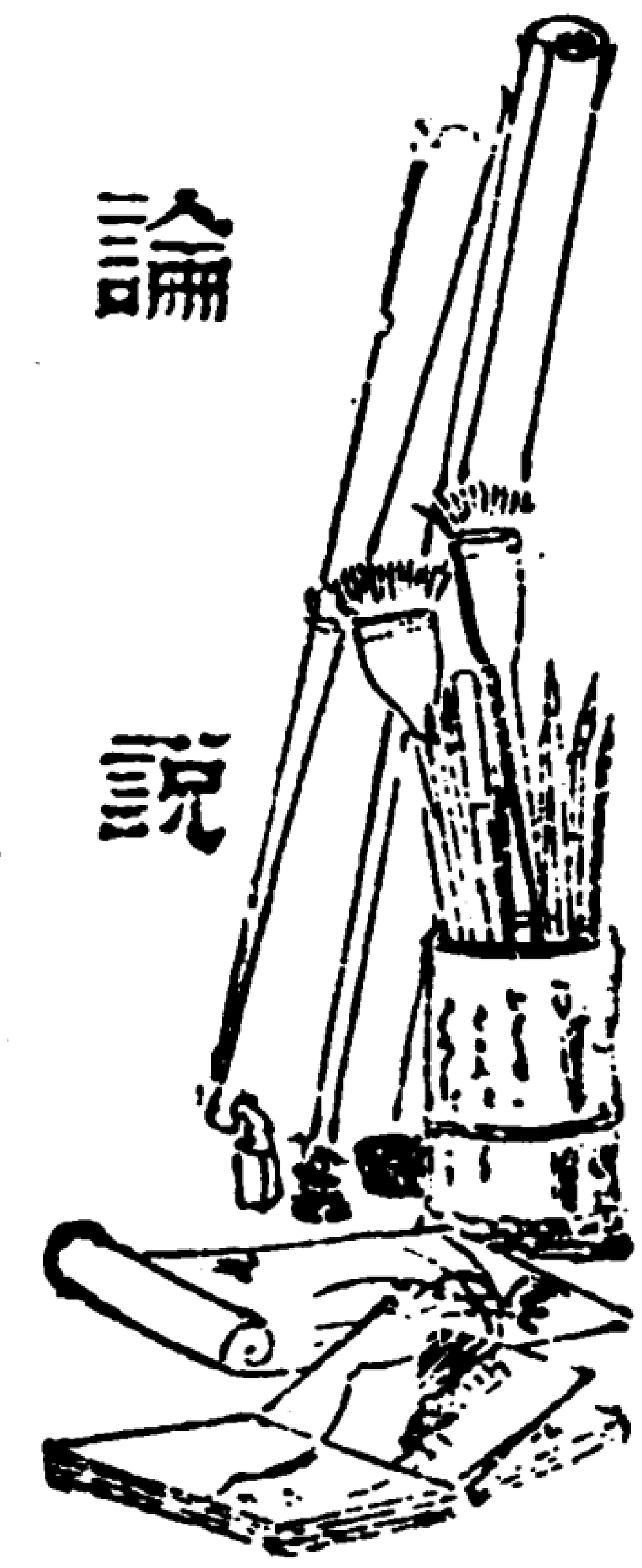
女子高等師範學校本科卒業生



仙臺榴ヶ岡櫻樹の景



同所第四聯隊兵營



論説

忍

女子高等師範學校教授文學博士　南摩綱紀先生演説

私は忍と云ふ御話を致しませう、何うも人間は忍と云ふ事を知らなければ、何うしても今日世の中に立つ事は出來ませぬ、私共は常年八十歳になりましたが、是迄經歴致しました事を考へて見ますれば、種々艱難に遇ひましたが、此の忍と云ふ一事を以て先づ今日まで此世に生きて居ります樣に考へます、先づ一番に艱難の大きなものと云ふのは……私は會津の人間でありますから、維新の時に朝敵になりまして戰を致しました、今其の間の艱難辛苦と云ふものは中々に御話を致す事が出來ませんであります、此事は只僅かの行違ひから起つたのであります、伏見の戰爭が始まりであります、お若い方は御存知ありますまいが、中年以上の御方は御承知でありまして、之は必竟僅かの行違ひから戰になつたので、此御話をすれば中々一朝一夕に盡きる譯でありませぬ、其戰の起つたと云ふものは、基は「しのぶ」と云ふ「忍」の字が足りなかつたものだから、そこで天下の亂になつたのであります、して朝廷の御思召に反き朝敵にならうと云ふ樣な考へから、朝廷に對して弓を彎くと云ふ樣な譯ではないのでありまして、何うも双方で忍と云ふ事が出來ない處から、伏見や鳥羽の戰爭が起り、其れから天下の大亂と云ふものに成

りました、それで私共の方は第一番の朝敵と云ふものに爲られて、天下中の兵を皆引受けた樣な譯でありす、其時の辛苦艱難、城は燒けて姉妹兄弟は討死し、偶ま其中に鐵砲の丸にも當らず命だけ助かつたものは大きに仕合と云ふ譯であります、其間の辛苦艱難を忍びました事は誠に容易ならん事であります、

扨て此「しのぶ」と云ふ「忍」の字からして御話を致さんければ成りません、忍ふには先づ

（容忍、含忍、堪忍）（忍忿怒、忍困難、忍貧賤、忍耻辱、忍飢寒、忍睡眠、忍倦怠、）（殘忍）

右の如く忍ぶと云ふ事は善い方でありますが、只殘忍と云ふことが一つ惡い方である、矢張堪へ忍ぶと云ふ義から出ますけれども、思切つて人の難儀も何も構はぬと云ふ處から殘忍と云ふ事になるのである、今日世の中に立つて何か事業をする者は、此忍と云ふ事がなければ何の業も出來ませぬ、大事小事何事でも皆忍と云ふ堪へると云ふ處から出なければ何んにも出來ませぬ、其忍と云ふ事は古人も色々云ふて居りまするが、怒を忍ぶ恥を忍ぶと云ふ事が就中忍び難いものである、之はお若い諸君方は最も御心得では御座りませうが、常に善く心掛け置かねばなりませぬ、一番人の七情の中で起り易いものは怒であります、此怒と云ふものが遂には身を誤まる基になります、又辱を忍と云ふは堪へられんものである、之を忍といふことは最も大切な事で、婦人方杯は他人の嫁になつて身を立てなければならんものである、不見不知の處へ嫁に參るものであるから行く先き〲には家風と云ふものがある、其れに姑もあれば小姑もあると云ふ樣なもので、然う云ふ人に向つて堪へ

兼ぬると云ふことが澤山に起るものである、そこを自分で忍び堪へて置かなければ身を立てることが出來ませんのである、皆さん御承知の……「堪忍のなる堪忍は誰もするならぬ堪忍するが堪忍」是等は誠に善い歌でありまする、又諸君方の御承知に成つて居ることでは御座りませうが、孟子の言にも人からして不法の侮辱を與へられた時には、自分で我身を顧て何にか己の方に惡い事があるから此樣な侮辱を與へらるゝのであらうと、自分を考へて見まして而して自分に何にも欠けた事のない、それでも先の人が不敬を申すと云ふならば、又己を顧みて之は何うも先の人が心得違であると思つて、何も無理に爭ふにも及ばぬ、之が即ち忍ぶのであります、そこで身世準繩と云ふ本に、逆レ我者只消ニ一箇忍字定省一片時便到ニ順境。方寸寥廓矣。故曰忍ニ過事一堪レ喜。

此樣な事がある、今申た樣な不法の者があつた時に、忍と云ふ字を以て考へて見れば已の心がさつぱりとして順境に至るものである、それ故に忍と云ふことを持つて居れば餘程面白い事がありま す、又

以ニ厚道一待レ人。正ニ自己一占ニ地步一處。故曰寧使ニ我容レ人。勿レ使ニ人容レ我。寧使ニ人負レ我。毋レ使ニ我負レ人。

之は如何にも善い戒の例であります、此譯は御分りでありませうが、自分の身を貴くして高尚にして人間の道を盡すと云ふ處へ心掛けるのでありま す、人の惡い處は怒らず責めずして、其れをば堪辨して容れて置くのであります、それは善いが已の惡い事を堪辨して置くと云ふ樣に成つては可ませぬ、人からして決して自分の惡い事を容れて貰ふ樣になつては可ませぬ、他人が惡くして自分

が善いとも人のことは人に任しておいて自分の方から人に背かぬ樣にする、自分が人に背くと云ふ樣になれば人も自分に對して善く盡さないと云ふ事になる、それから

我欲ㇾ求二勝於彼一。則彼亦欲ㇾ求二勝於我一。讐々相報。遂至三彼家蕩ㇾ產禍遺二子孫一。豈若含忍退讓聽二人和解一。則省ㇾ財省ㇾ力。心安身寧。且不ㇾ結二仇怨一。使三子孫亦蒙二其庇一。寧不ㇾ善乎。

これも矢張御分りの通りだが、自分が人に勝ちたいと云ふ事を求めますれば他の人も、矢張自分に勝ちたいと云ふのでありまして、遂には爭が起つて來ると云ふと互に仇の樣になつて來て遂には家を破り產を蕩する樣になつて來るのである、之が自分一代では濟みません、子供や孫の時代までに及んで來て、此爭は中々解けるものでありません、それ故に何事も勘辨して謙遜辭讓を致して居らなければいかぬ、若し爭が起つて人が仲裁してれるものがあれば其人に任して置く、然すれば金も入らず身も安んじて居られると云ふ事でありまするが、此事は實に善い法でありまする、此事を守つて居れば無理が無くなつて、恥が無くなつてくるものであります、之れは人より自分の方を一等も二等も高い處におくと云ふ事になるのである、尙ほ御話しする事もありますけれ共大意は此外にありませぬのであります、尙ほ皆さん御承知の事でありませうが、大石良雄と云ふ人が復讐をする前の事であります、吉良家に油斷させる爲に島原で放蕩無賴の事をした、其時に何處の藩の者か詳かなりませぬが喜劍と云ふ人がありました、此人が兼て赤穗候の讐を討たせたいものだと考へて居りました處が、段々大石が不行跡をなして讐討の事も忘れて仕舞つたと云ふ話を聞きまして、

喜劍は大に力を落して居りました、或る日此喜劍も島原に遊びに行きました處が、偶大石に出遇ひました、そこで喜劍は宜い處で出遇つたと思つて、大石に向ひ段々と復讐のことを說得致した處が、良雄は何んとも答へない、只笑つて居る許で少しも承伏する樣子がない處から、喜劍は腹を立て丶手前は亡君の仇を反すことも心得ず、實に禽獸同樣で人間でない、之から貴樣を禽獸取扱にするがよいかと云つたけれども、良雄は矢張り少も頓着しない、それから喜劍は益々腹を立て丶自分の足を出して足の指の先に鮑魚をはさんでそれを良雄に食へと差出した、良雄は手を突いて口付けに其鮑魚を食つて尙は其汁までなめました、それから喜劍は益々腹を立て丶汝等の如き者と話するも穢はしいと踏んだり蹴つたりして去つて仕舞ひました、然るに良雄は怒つた樣子も何んにもない、その後に喜劍は國へ歸りまして、再び江戸へ來て見ると、然うすると、丁度其時良雄等が復讐致した高輪の泉岳寺へ參つてから幕府へ自訴致し其々切腹したと云ふ事を聞きました、そこで喜劍は大層恥まして、良雄を人でないと云つたのは己の方が禽獸で有つた、己の內心で良雄を人でなしと思つたは第一己の心の罪である、己の目が良雄を人でなしと見たのは己の目の罪である、又良雄を罵つたのも己の舌の罪である、己の足で良雄を禽獸扱にしたのは、己の足の罪である、己の一身皆罪である、實に申譯が無いと云つて、一度國へ歸り職務の事を一切片を付けて、再び江戸へ出まして、而して泉岳寺へ詣で丶義士の墓の傍で腹を切りました、それで今も泉岳寺の義士の墓の一番裾の處に喜劍の墓と云ふものがあります、此の時の良雄の忍んだ事に至つては實に感服の至りである、之

は亡君の爲に仇を復さうと云ふ大事が有つたから、何んなことでも堪へ忍ぶと云ふ事を致したのであります、倘は忍と云ふ事に就ては御話も中々盡きるものではありませぬが、先づ大體の意味だけ御解りになつただらうと考へます、

英國婦人叢談

ヒユース孃談話
宮館貞記

余は女鑑編輯部の依囑に應じ友人パーマー孃を介して目下本邦に來遊中なる元英國ケンブリッヂ女子高等師範學校々長ヒユース孃を麴町下二番町の寓居に訪ひ英國女子に關する孃の高見を聽くことを得たるは余の最も幸榮とする所なり。

唯夫れ本稿は會見の席上に於て其要點のみを筆記し後ち思ひ出の儘修補を加へたるものなれば或は脫漏誤解なきを保すべからず其責單へに余に在り。

余は孃の百忙中再三余を延見して懇篤說明の勞を取られたることに付き深く感謝の意を表するもの也

貴國と英國とは生活の狀態慣習等に著るしき差違がありますから英國に於ける事物の眞相を說明することは極めて困難であります特に貴國と英國との婦人の狀態が甚しく懸絕して居るのでありますから婦人の問題に關して適切なる說明を與ふることは更に一層の困難を感ずるのであります

〇英國婦人の職業

婦人の職業選擇に付きましては爲し能ふものと爲すこと能はざるものとを標準として定むべきは言ふまでもありませぬ

英國に於きましては御承知の通り婦人は勿論軍人となることは出來ませんが其他牧師となり辯護士となり亦た國會議員となることも出來ませぬ併し近來に至りまして種々の新なる職業は婦人の爲めに開かれましたが或者は男子の團体の爲に妨害せらるゝものもあります例令ば額の縁を取るが如き職業は女子には適當して居りますが此頃男子の此職業に從事する者の團體が契約して女子の職工を使用する處には決して雇はれぬと云ふことにしましたそうです

農業は婦人の重なる職業の一つであります尚亦た近時に至りまして婦人が園丁の頭になることも漸次增加の傾があります現に「キユー」、ガードン」には婦人を使用して居ります園藝の中には牛酪「クリーム」等を製造することをも含んで居ります

工業　力を要せずして熟練を要する種類の作業に付きましては多くは婦人を使用して居ります何となれば其賃銀は男子の職工に比して遙に低廉であるのみならず力を要せざる作業でありますから男子の代りに婦人を使用するも實際の不都合がないからであります亦た英國の婦人が近來に至りまして間々工業監督等の如く稍々高尚なる職業に從事して居るものがあります

鑛業　昔時に於きましては婦人にして鑛業に從事するものもありますが現時に於ては婦人にして地下の作業に從事するものは全く其跡を絶つに至りました

之を要するに非常の精巧を要する作業に婦人を使用することは極めて稀であります其理由は此種の作業に從事し得るまでには長期間の練習を要し且此社會の女子は早く結婚するの必要があるからであります

婦人の職業中で最も多く從事して居るものは學校敎師又は家庭敎師であります現に最新の大學乃ち「ウユルス」大學校には八名の婦人敎師がありまして夫れ々々の講座を分担して居ります男子のみを收容する中等學校に於きましても幼年生を敎育することは婦人は男子よりも遙に優つて居ります元來婦人の職業問題に付きましては二つの思潮があります第一は現時の男女職業の配合適否は明確ある理論の標準に據りて定まりたるものでなく唯偶然の配合乃ち(chance)に依りて定まつたものであるから向後十二分の經驗と理論の指示する所に基づきて別に新らしく男女職業の配合適否を定めなければならぬと云ふことゝ第二は女は漸次男子の職業を奪ひ去るものであるから男子は女子の職業に就くことを成るべく妨害せんとする傾向あることゝの二つであります現時に於ては第一の思潮は漸次其勢力を增加するの傾を現はして居るのであります

亦た婦人職業問題に關し之を實際の狀態に徵しますると婦人の爲めに新なる職業を與ふることは公共又は男子の團體に依りて助けらるゝよりも寧ろ個人的の助力に因ることは却て多いのであります一例を擧げますと或郵便局長の如きは婦人の爲めに新職業を與ふる事に盡力し電信郵便等に關する種々の職業を女子に與へた樣な類であります

座中友人パーマー孃ありヒユース孃の右の談話を補充するが爲めに最近發兌の「ケヤーチ、タイムス」を寄せらる中に「女子の廢物」と題する一論文あり之を左に反譯して讀者の參照に供す

『女子の廢物』

年若き婦人の新職業は最近三四十年來著るしく增

加したるに拘はらず尙未だ現在及び將來に於て益々增加せられんとする婦人求業者の需用に應ずるに足らず

三四十年前に在りては例令上流の婦人と雖も一朝の障害に遭ひ自働自活せざるべからざる場合に臨みては家庭又は學校教師となるの外他に何等の職業とてはあらざりき左れども彼等は元より教育に關して適當なる訓練を施されたるものに非ざれば多くは此唯一の職業にさへ有り付くこと能はず若し幸にして採用せられ熱心に其任務に從事せりとするも其結果は餘り滿足し得べきものにては非ざりき

今や往時に於ける此の如きの狀態は大に變革せられ婦人の職業中には看護婦なる一科をも加へられて多數の求業者を吸收し亦た教育の擴張と共に官立學校又は家庭の教師として婦人の需用は著るしく增加せり其他或は醫學生と爲りて學位を得る者郵便電信の書記に任せらるゝ者若しくは「タイプライター」として雇はるゝ者等ありて婦人の求業者に利便を與ふること尠からずと雖も然ども之を婦人職業問題といふ全局の上より觀察するときは唯僅に其缺點の一小部分を補充したるに過ぎざるのみ試に吾人をして現在の實狀に照し婦人職業問題に關して少しく言ふところあらしめよ記者は「アベルデーン」伯爵夫人の曾て某公會席上に於て演説したる語を記憶せり曰く『予は總ゆる廢物の中にも職業を求めて就くこと能はざる婦人の廢物ほど憐むべきものはなしと信ず』と警語猶依然として耳に存す盖し彼等は單に其女子たるが故に桎梏せられ迫害せられて其業に就くこと能はず終に『女子の廢物』として其生涯を了するに至るのみ天下豈に亦た此の如く非理不公平なるものあら

んや。最も普通なる世間の實例を擧げて之を言はんに例令ば牧師醫師又は法律家が其職業上の収入を以て男女兒各々三人ある一家を經營すと假定せよ其中男兒丈は兎も角相當の敎育を與へて皆夫れ〳〵の職業に就き社會に出で丶自活することを得るとするも偖て女兒等の身上に就ては如何すべきか彼等は結婚の年頃に達すると共に舞踏會庭球會又は其他の會合に臨み所謂交際社會なるものに仲間入して各々其好配を求めざるべからず此くすること凡ヶ年乃至十ヶ年に渉りて女兒三名の中一人は他に嫁し他の二人は未だ結婚の機會なしと假定せよ彼等の結婚時機は年一年と經過し去りて其希望するところ竟に意の如くなる能はず

一方に於て彼等の憐むべき父は其娘の好配を見出すが爲めに常に同悶なる交際社會に出入するを厭ふに至るべし然れども其娘等は猶言へらく「是幸福なる時期也」と左れど其所謂る幸福なる時期と云へる語の意味は極めて狹く亦た極めて覺束なきもの也斯くしつ丶ある間に其父は娘等の婚家を見ること能はずして死亡し一家分散するに迨んでは是迄結婚を以て女子唯一の處世法なりと信じて養育せられ而して何等の過失なくして不幸にも其唯一の希望たりし結婚を實際に遂行すること能はざるいと不運なる娘等は俄に社會の風波に對抗して自活の途を講ぜざるべからざるに至るべし左れども彼等の年齢は其幸福なる結婚を夢想して交際場裡に出入しつ丶ある間に既に老い最早職業に有り付くこと能はざるに至る是滔々たる世上有り勝ちの實例也

故に結婚を以て女子唯一の處世法なりと信じ單に之に向て其全力を注ぐは屢々其女兒等をして貧困淪落の苦境に陷らしむるものにして極めて危險な

るものあるに依り將來女子敎養に對して取るべきの方針は從來の如くに『結婚は女子の救也』といふ謬想を抛ち女子をして財產を作り腦髓を開拓し舞蹈庭球等の如きつまらなき遊戲に其靑年を空過せしむるよりも寧ろ一層有益にして快活なる事業に向はしむることを主とせざるべからず

右の如く女子敎育の方針を一變するに付ては從つて亦た現時社會の狀態をも改良するの必要あり乃ち大に女子職業の門戶を開きて求業者を歡迎せざるべからず若し夫れ女子にして容易に確實なる職業に從事し自活の途を講ずることを得る場合に於ては從來の如くに結婚を以て『女子唯一の處世法』なりとするものなく少なくとも結婚を以て此上なき女子の名譽なりと信ずるものなきに至るべし過去及び現在に於ける靑年女子の多數は朝に庭球會に臨み夕に舞蹈會に列なり唯だ結婚を目的として優遊日を消し而して『最も幸福なる時期あり』と云ふされども人生の眞の幸福は常に規則正しき作業に從事し其餘暇を以て適宜の快樂を取るに在る也

現時女子の狀態に對して一大改良を加へざるべからざることは恐らくは何人も拒むこと能はざるべし吾人は「アベルデーン」夫人の語を繰り返して『社會に於て女子の廢物ほど悲しむべきものはなし』と言はんと欲す現に各種の婦人會が交際社會の興快を感ぜず又た結婚の目的なき氣力あり才能ある世上幾多の婦人に婦人の職業を與へつゝあるは最も嘉すべき事柄にして目下婦人市場に堆積せる求業者を賣捌くに與りて最も力あることは明確なる事實なりと雖も其援助たる制限的のものにして未だ容易に滿足を表し得べきものにあらず之を要するに婦人職業の門戶を更に大に開放すること

は實に目下の急務にして早晚之に對して何等かの方法を立てざるべからざることは瞭かなり

吾人は婦人の職業範圍を更に大に擴張せんと欲するに方り先づ女子の父兄たる人々に對して熱心に勸告せんと欲する所のものは是迄の如く結婚を以て女子生存の終始の目的とは見做さずして例令富豪の家に生れたる女子と雖も更に一層其職業的精神を發育せしむるにあり『男女職業分配の不等』は現時に於て最も重要なる問題の一なり女子職業の範圍を擴張し就業婦人の報酬を增加することは一般婦人の地位に關し最も切實なる利害關係の問題にして社會に對して之を要求することは實に婦人たるものゝ責務也

勿論現時の社會と雖も天才ある婦人は或は著述家として或は畫家として或は俳優として夫れ〴〵の職業に從事することは極めて容易なりと雖も吾人の言はんと欲する所のものは是等秀逸の少數婦人にあらずして多數平凡の婦人が單に其女子たるが故に壓制せられ桎梏せられて碌々其生涯を了せざるべからざる者の爲めに社會の正理に訴ふるにあるのみ（未完）

女子教育

湯武居士

男子と女子とは、孰れ尊く孰れ卑しいなどゝいふ論は、今更めかしく喋々すべきことではない。男子は男子として、人間社會に尊く、女子は女子として、人間社會に尊いのである。男子と女子とは、生理的に於いて、心理的に於いて、既に異なる所があり、隨つて又其の天職に於いて、異なつて居るのである。男子をして女子の如くならしめやう

として、出來るものではなく、女子をして男子の如くならしめやうとしても、出來るものではない。若しさうせしめやうとするものがあつたなら、之は自然法を解せぬ馬鹿者といはねばならぬ。然るに男女其の性を異にし、其の天職を異にするものなることを忘れ、女子をして男子と等しからしめんと志す教育家の世にあるは、片腹痛き限りといはねばならぬ。

凡そ教育は、人々の個性に隨つて施すのが、最も教育者の務むべき點であるとは、如何なる教育書を繙いても、警告してある所である。況んや性を異にし、天職を異にする男女の間には、教育も亦異なる所なかるべけんやといはねばならぬ。女子は内に在つて一家内を整治するが、其の性質に從ひ、天職に副ふ所であつて、外に出で丶男子と競爭すべき性質を有せず、又之が其の天職に副ふものではない。然るに女子を教育して、外に出で丶男子と競爭するに適せしめんことを務むる教育家あり、殊に米國の教育家に、其の多きを見る。米國をして天職を蔑如せる、所謂老「ミス」多きを致さしめたるは、彼の國教育家の與かる所多いといつて、差支ひはないのである。「三人の子女を擧げて育てた女子は、大學を卒業し、「ドクトル」となつたが、然も子を擧げぬ女子よりも偉い」と、リヒテルのいつたのは、彼れは女子の天職を盡し、此れは女子の天職を盡さゞるからのことであらうと思はれる。

我が國でも、追々女子教育が盛んになつて來たのは、實に悦ばしいことではあるが、往々科學專門の教育を女子に施し、之をして男子の如くならしめんとする向きの教育も行はれはせまいかと、氣遣はれるやうの事の見えるのは、甚だ寒心に堪へ

ぬ次第である。されば此の際女子の性に適ひ、女子の天職を盡くすに副ふやうな教育方法を研究して、女子を導くは急務であると思ふ。若しこれなくして、徒らに女子教育を絶叫し、女子教育を奬勵するときは、勢ひ男子の修むべき科學專門の教育に、滔々女子を追ひ驅るに至るを免れぬ。余は教育家、殊に女子教育家の、大に此の顧慮せられんことを望むものである。



近古勇婦百譚

黒金子

榊原政房の夫人（其二）

勇婦百譚の第二として、御話致しますのは榊原式輔政房殿奥方の御事蹟で御ざいます此御方は世に名高き備前少將光政公の御息女で榊原家へ御緣付に相成りお子樣が出來ますと間もなく政房殿御逝去仍て嫡子熊之助政倫殿三歳で家督御相續式部大輔と受領せられまして奥方は三十幾歳の若後家樣でございますが元來佛教にあかるく精進潔齋に身を治め人々に情け深くあらせられました扨頭髪は折髪に取上げ玉ひ假令削りこぼたぬとて心は墨染なれ責めて我子が二十歳になる迄は斯くてあらんとの事でありました、此御方は御父上光政公の御氣象を受け繼がれ心飽迄剛く致して若年の式部大輔殿を後見なされ家中を治め先祖の式目相違なく取行はれましたから上の思召も厚かりし爲め越後高田の城主水野隼人正が殿中狼籍によつて其家滅却に及びし折には式部大輔殿若輩ながら上の御目鑑を以て城地受取の大役を仰せ付けられ越後へ

出發に及ばれました扨其留守中江戸には大火がありまして既に御城も危き程に其頃奥方の住まはれた小石川御門内の上屋敷は猛火熾んに烟を吹き揚げ大風土砂を飛して四方八方眞黒に相成り宛も暗夜の如く其上近邊の家屋土藏の燒落つる音は百千の雷が一時に落掛れる如く壯丁の叫び罵る聲老幼の泣き悲しむ聲と一處になりまして其物凄き事譬ふべき樣ありません此折柄奥方には神色自若として毫しも平生と異りし樣子なく家老を呼出されて申さるゝは箇樣な時節には野心逆謀の者あらんも圖り難し若自然の事もあらば式部こそ留守なれ我身女ながらも上の御用に立ち家の名をも揚げんと思へば其覺悟せよと申され更に公儀御城使某に命じて早速御城へ遣はされ御老中迄上樣の御機嫌を伺ひ出其上御用も候はゞ一方の消留なり又は何方の御固めなりとも仰付られ候へ式部が母なる者池の端に罷在候と申遣されましたには御老中一同驚き感ぜられましたるよし扨其々手配を終りまして御自身中屋敷へ立退かせ玉ふ其出立を見てあれば金小札緋縅の鎧に白檀の小手を差し紅梅の衣を着され其上へ火事羽織に七枚綴の頭巾を着用に及び太く逞ましき馬に打跨り近習の女中の同じ樣に甲斐々々しく打扮たる者五十三人を馬の前後左右二行に列を正し其外手廻りの人數數多召連れ各長刀を提げ諸士は何れも物具の上に火事羽織を着しまして一同小石川御門より正々堂々と乘出されました此夜は近年の大火でしたから往來の諸人行違ひ行き當り混雜を極めましたけれど此の奥方の出立には道路に充滿せる老若男女皆膽を消して左右に片寄り火事見舞の者も足を止めて見物し天晴雄々敷御振舞かな流石は武勇の譽高き光政公の御息女であると一同感服致したと申す事であります

居候

其說く所は平易簡明なる日常道德上の事柄のみにして絕えて理論じみたるところ無之、囚徒の如き者に取りては此上なく適當致居候に付、孰れも熱心に其敎誨に耳を傾け居候云々

彼は單り普通敎誨のみを以て滿足するものにあらず彼が獄內の經驗は囚徒等の終日爲すことなくして徒に怠慢に耽ることの道德上及び智育上の發達に對し太甚しき妨害を及ぼすものなることを看取し之を矯正するが爲めに彼は男囚に對して麥稈帽子、骨匙等を製造するの作業を與へ女囚には襯衣等の仕立方を敎ふるの傍に於て別に囚徒の放免後皆それ〲の業務に就かしめ幷に彼等を監督するが爲めに要する資金の準備を工夫せり。

彼が多年一日の多く其全力を傾けて盡瘁せる囚徒の改善と慈善的事業とは一に皆一己の微力に依り且世人の注意をも喚起することなくして行はれたるものにてありき、蓋し當代の世人が一週間僅々十二志を超へざる所得を以て覺束なくも其口を糊し其居を賃するが如き微々たる一仕立職が斯くも至難なる事業に着手し而かも其結果の大に見るべきものありしに對して赧然たらざるを得ざりし也。

彼は總ゆる貧苦に對抗し其信ずる所に向つて直進せり、彼は其高倘なる事業を拋棄せんよりは寧ろ甘んじて飢餓に死せんことを願へり、彼は此の如き狀態の下に在りて念頭一毫の榮譽心なく亦た其勞に酬いらるゝことを願はずして年は年と共に過ぎ去りぬ。

千八百二十六年祖母の死亡に因りて彼は十二磅の年金を受くることゝなりしも此年金は實際の上に於て彼の窮厄を救ふに足らざりき、何となれば彼

は餘りに囚徒の改善に熱中したるが爲め其本業たる仕立職は殆んど全く廢頽に屬したれば也此時に方りて彼の應に解決すべき身上の問題は囚徒改善の事業を中止して其本業に復すべきか若しくは其事業を繼續して窮乏の極に陷るか二者其一を擇ぶの外なかりき。

彼は此問題を解決するに方りて毫も躊躇する所あらざりき彼は其日誌に記して言へらく「予の事業と一身の安樂とは元より同一の論にあらず予の心は既に決せり、若し夫れ正理人道を說きつゝある間に於て假令窮乏の極に陷るとするも個人の貧苦を以て彼等多數の改過遷善に比すべくもあらず」と。

二十年間に渉る彼が心身上の過勞は終に全く其健康を毀損し監獄敎誨事業を擧げて之を他人の手に引渡さゞるべからざることゝはなれり、されども此永き年月間に於ける彼の効績極めて顯著なるものありしのみならず現時存在するが如き最も進步したる監獄敎誨の基礎を作り之を後世に垂れたるの功は永く沒すべきに非ざる也。

晚年更に工女學校を管理し或は市內の貧民窟に病者を訪問して親しく之を慰藉する等毫も寧日とてはあらざりき、然れども是等過度の勤勞はさなきだに孱弱なる彼の身體を毀害して復た起つべからざるに至らしめ、此くも高尚純潔なる慈善家は千八百四十三年の十月十五日飢寒交々至るの貧境に居りて溘焉簀を易へ遺骸は「カイスター」寺畔に葬られぬ。

「サラー、マルチン」女の偉大なる生涯は斯の如くにして了りぬ、吾人は彼の純潔にして一點の曇なき博愛の心は彼を驅りて幾多の困難に忍ばしめ正義人道の爲めに貢獻する所尠なからざりしに拘

はらず當代の世人が彼の功績に對して何等酬ゆる所なかりしを見て轉た人心の輕浮なるを歎せずんばあらず、彼の念頭には元より毫末も榮利の念あることなく貧居索莫の境涯に在りながら心裡無限の愉悦を含みて永遠の眠に就きたるには相違なきも吾人は切に彼の存命中に於て世人の感謝を捧ぐること能はざりしを惜むの念に耐へざる也。

唯願くは貧民學校の開祖「ジョン、パオンヅ」と同じく「ヤルマス」の一女工「サラー、マルチン」の名を「ホーワーヅ」「フライス」「パッキトトン」及其他獄制の改善に從事して令名を博したる士林の間に列記し千歳青史の上に不朽ならしめよ。 （完）

徒然草の一節

東宮侍講 本居豐頴

花はさかりに、月はくまなきを、のみ見るものかは。

此の段は、専ら感情風韻といふもの、事を論じ、人情に雅俗の別あるを云ひたるなり、花と月とを對へ、「さかり」と「くまなき」とを對へて、下の「のみ見るものかは」と云ふ語は其の二事を受けたる文なるが、正しく云ふ時は「さかりに」のにを省きて「花はさかり月はくまな

き」とあらば下のをにて受くる意明かなれども、こゝは花と月との二事を連ね云へるが故なり。さて「のみ」と云ふ詞最も力ありて主眼とする所なり。「見るものかは」反語にて見るものあらんや見るものに非ずとなり、固より花は盛りを賞し月は明らかなるを賞づる事は無論の事なれば、「のみ」と云ひて、其の他に見るべき點あるを云ひたるなり。さて、此の一句は此の段の大綱にて次の條より其理由をあげたり。

雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへを知らぬも、なほあはれに情深し。

この月花に直接に對はずして月花を愛する情の深きを云へり「たれこめて云々」とは、古今集の「たれこめて春のゆくへもしらぬ間にまちし櫻もうつろひにけり」と云ふ歌の意なり。「なほ」はヤハリの意にて現に月をも花をも見ずとも其情は何れも深き由を云へるなり

さきぬべきほどの梢ちりしをれたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞がきにも、花見にまかれりけるに早く散り過ぎにければ、とも、さはる事ありてまからで、などもかけるは、花を見てといへるに、おとれる事かは。

「さきぬべきほどの梢は花のいまだ全く咲きいでざる間の梢にて、「さきぬべき」とは將に咲かんとする前を云へるなり。「ちりしほれたる庭」は、花の散りて美はしき色も失せ枝には既に殘らざる庭をいふ。此の二つは何れも花を賞翫する方よりは不滿足の時なるを「などこそ見所おほけれ」と却りてよしとしてほめたるは情を盡くす方より感深きを云へるなり「歌のことばがき」は「はし詞」ともいふものなり。「花見にまかれりけるに早くちり過ぎに

ければ」は、野にても山にても花見に行きたるに既に落花したる後にて花の無き時の事を云ひ「さはる事ありてまからで」は朋友などの花見に誘はれたる時何か他に故障ありて得行かぬ時を云ふ。こは何れもかゝる時に遺憾に思ふ情を歌によむをいふなり。「花を見てといへるにおとれる事かは」とは、はしがき花を見てと云ひて、まさしく花を見たる歌のあるよりも、却りて前の二種の塲合の如きはしがきして、遺憾にも花を見ざる意の歌ある方、風情ありて面白しと云へるにて、前條の雨夜に月を戀ひ、引籠り居たる間に、花盛を空しく過したると全く同意の感を陳べたるなり。

花のちり、月のかたぶくを、したふならひは、さる事なれど、ことにかたくなゝる人ぞ、この枝かの枝ちりにけり、今は見所なしなどは云ふめる。

「花のちり」と「月のかたぶく」とは二つの事にて落花月沒を惜しみ慕ふ習ひは、人情の常にて、さるべき事には有れども、それを評する世人の詞に雅なると俗なるとの別ある事を云へるなり。「ことにかたくなゝる人」とは殊にすぐれて頑愚の人物といふ事にて、少しも雅び心なき俗物といふが如し。「この枝かの枝ちりにけり今は見所なし」は前に云ふが如き俗輩は花の散りたるを見て、却て情深き樣なる事に心付かず無造作に見るに足らずと云ひ放つを云ふなり。故に花の散るを惜しみ、月の傾くを慕ふ主意は各各別は無きも、雅意ある者は自然如の如く冷淡に云ひ放つ事はせぬものなるに對して、俗物の毫も風韻なきをいへるなり。

紫式部日記講義（三十二）

井上頼文

御湯どのは、とりのときとか。火ともして、宮のしもべ、みどりのきぬのうへに、しろきだうしききて、御湯まゐる。

そのをけすゑたるだいなど、みな、しろきおほひしたり。

をはりのかみ、ちかみつ、宮のさふらひのをさなる、なかのぶ、きて、みすのもとにまゐる。

みづし二人、きよいこの命婦、はりま、とりつぎてうめつゝ、女房二人、おほもく、うま、くみわたして、御ほとぎ、十六にあまれば、わるうすもの、うはぎ、かとりのも、からぎぬ、さいしさして、しろきもとゆひしたり。かしらつきはえて、をかしくみゆ。

釈義

○御湯どの　御湯殿にて、御降誕の皇子に、御湯を浴せ奉ることあり。然るを畧して、たゞ、御湯殿とのみいひならはせり。七日の間は、朝と夕と、一日に、一度づゝありて、さまぐの儀式あり。

○とりのとき　酉の時にて、今の午後六七時間なり。こゝは、夕の御湯殿の儀式なり。

○宮のしもべ　中宮に奉仕せる下司男をいへり。

○みどりのきぬ　緑色に染めたる衣なり。

○しろきたうじき　白き當色なり、當色とは、衣服令の義解によれば、その位階に相當したる服色をいふことなれど、御うぶやの間は、すべて白き色のものを用ゐるが常なれば、白き色を當色といへるなり。さて、こゝは、緑色の衣の上に、白絹の袍を着たるなるべし。

御產部類（源禮記）に、

二十九日、云々始二御湯殿一、云々、貞仲、并、自餘廳官、各、着二當色一（以白袍一、着二例衣上一、着二火色ノ襷等ヲ一）云々

又、同書（源禮委記）に、

史生廳代、佐伯ノ貞仲、云々、六人、皆、着二束帶白重一、上着二當色一（白生絹）云々、

又、同書（敦記）に

廳官等、着二當色一運二御湯殿ノ物具一、以二白絹袍一着二例袍之上一

などあるを以て、その大むねをさとるべし。

○御湯まゐる　御湯殿のことに立ち働くをいふ

○をはりのかみ、ちかみつ、云々　尾張守藤原近光、中宮職に附屬せる武士の長なる、源仲信、何れも、御湯奉仕の役人なり。

榮花物語、初花の卷に

宮の侍の長、あかのぶ、舁ぎて、御簾のもとにまゐる。

とあるを以て、考ふれば、御厨子を舁ぎて、御湯殿の御簾のもとにまゐれるなるべし。さては、なかのぶ、きては、かきての誤ならん。

○みづし　御厨子は、もと、厨にて、食物を載する臺とせるもの、棚、または、開き戸などをつけたり。されど、こゝは瓮を据うる臺をいへり

○おほもく、うま　大木工、右馬にて、ともに、女房のよび名。

○御ほとぎ　ほとぎは、小き瓶の類にて、腹大きく口小さく造りたる土器なり。和名抄に

瓫、唐韻云、瓫（浦奔反字亦作ㇾ瓮、辨色立成云、比良加、俗云、保止岐）瓦器也

と見ゆ。

○十六しわまれば、わる　わる、類從本の一本に

いるに作る、瓮に、分配したる湯が十六に満つれば入る丶なるべし。わるは、入るの誤なること、榮花物語初花の巻に

とりいれつ丶、うめて、御はとぎにいる、十六の御缶なり

と、わるにて、知るべし。

○うすもの丶うはき　こ丶より、はえて見ゆ」までは、御湯殿の役に奉仕したるもの丶、ありさまをいへり。うすもの丶うはぎとは薄き織ものにてつくりたる表衣なり。

○かとりのも　練にてつくれる裳なり。かとりは、堅織の約言にて、きはめて、こまかに織りたる絹の名。

○さいし　釵子をさして、さげたる髪をあげたるなり。

伊勢貞丈ぬしの安齋随筆に

釵子は、宮女の髻の飾なり。今世の詞に、オシヤシ」と云ふことは、即、御釵子なり。さいしの轉語なり。玉篇に云ふ。釵、楚街切、婦人岐笄なり。

又、いはく。

女房、式正の時は、垂髪して、項の上に、髪を瘤の如く束ねて、是を「かぶ」と名づく、其「かぶ」に、釵子をさす也。別に圖あり、如此するを髪上げといふ

と、いへるは、こ丶のさまなり。

○はえて　はえは、夕ばえなどの、はえと同じく、黒き髪に白き元結の一段と榮えて、目だちて見ゆるをいふ。

譯　解

さて、御湯殿にて、御初湯をつかはせらる丶御儀式は、酉の時とか聞けり。

火點して、中宮職の、下司男は、緑色の衣の上に、白き常色の袍を着て、御產湯の支度す。

その御湯桶を据ゑたる、御厨子の臺など、皆、白き覆をなしたり。

尾張の守、藤原の近光、および、中宮職附属の武士の長たる、源の仲信などが、その、御湯瓮を載せたる、御厨子の臺を舁ぎて、御簾の下に參る。

その御厨子二つをば、きよい子の命婦といふ女房や、播磨といふ女房が取次ぎて、御湯に、水をうめつゝ、居たるに、大木工、右馬といへる女房二人して、その御湯を汲み渡して、御瓮十六に滿つれば、それをまたほかのうつはに入る。

さて、御裡殿の役に奉仕したる、女房たちの裝束は、羅の表衣に、縑の裳をつけ、上には、唐衣を着て、頭髮は、頂の上に束ね、釵子をさして、白き元結したり。

それゆゑに、頭髮のさま、ひときは、見映えして、可賞く見ゆ。

和畫通信講義（第廿六回）

山崎彩峨

墨畫にては、白色のものは、淡墨にて勾勒に、色あるものは、沒骨に畫く。嫩葉、莖、枝は、淡墨を狹墨として、葉は筆先に濃墨を附して、沒骨に畫き（すべて、勾勒に畫き、後ちに塗りもてよし）乾きてのち、淡墨にて、花瓣に、隈を施し、濃墨にて、花心、葉脈を入る。幹あれば、濃墨にて、その部分を畫くなり。

彩色畫は、白色、または、他色の底部に匂へるものは、最初、胡粉にて、全瓣を畫きおき、乾きてのち、白色へは、黄がちの青色、他はその色にて



隈を入るべし。全色のものは、胡粉を含めたる筆先に、其の色を附して畫く。嫩葉、枝、莖は、赭黄に、少量の藍と胭脂とを和して、筆に含め、胭脂を狹墨となして描く。幹は、通常の赭墨か青色かを、實物によりて、狹墨となす。葉は、稚葉は、嫩葉に其の色同し。次は、黄がち青色、次は藍黄等分の青色、次は、藍量稍多き緑色、次は、これに、墨少しを和したるもの、次は、赭墨を筆

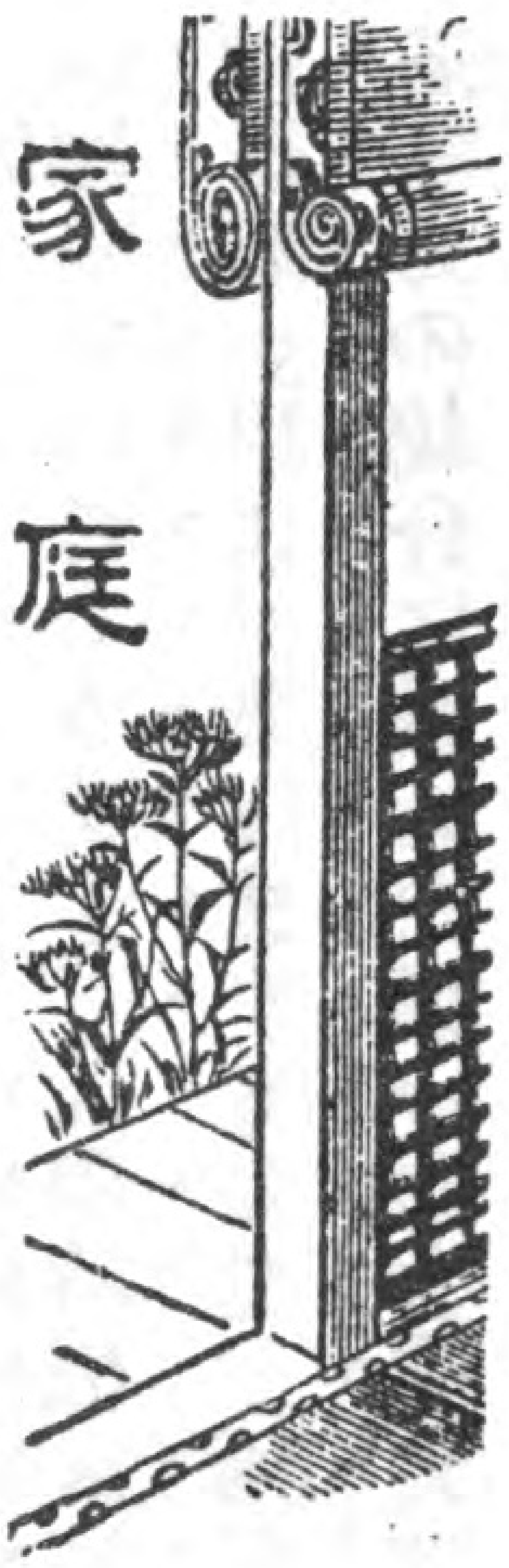
葉脈



先に附して畫く。裏葉は、表色の順にかゝはらず、すべて、黄がちの青色なり。花心の見ゆるものは、黄色にてときたる胡粉にて描き、葉脈は、藍か藍墨かにて入るゝなり。

枝かはすあたりのきゞの匂ふまで
しだりざくらに春風ぞふく　伴雄

古寺の春のあるじはおのれぞと
いはぬばかりの山ざくら哉　元數



實驗家庭の教育（六）

東京感化院長　高瀬眞卿

私が考へますに、子供と云ものは身體の發育につきて心意にも變化を來しますもので、其の身體の發育と云ものが二六時中平均に發育するのではない、或時機には比較的多く發育する塲合のあるものと思ひます、私は生理上の事は存じませんが感化院の幼年生に就て取調べて見まするト斯云事實があります、左の文は「感化資料」より摘錄してお目に懸るのであります

某生は心意の變化期にいたりしものなり、眼睛と音聲に變化の徵を示したり、此の際に一手段を加ふるは兼て期する處に心思を傾けしむるを得べく、彼が麁暴なる擧動は一變すべし但この時機は目下數日間の中なるべし

感化教育には斯云ことがあります、これは一寸詳くお話せぬと解り難いので一通り申ますが例へば三歳か四歳の子供に就て能く日常注意をなされば其子供の眼睛と音聲が變る事がある、俗に年ごろの女子に「聲がはり」がすると云ふ事があります此の「聲がはり」は十六七の女子にのみあるのではない、身體が發育する時機に達し體格が備はる塲合に必らず音調が變ずるのである、其故に三四才の子供にもこの變化期と云ものが必らずある、七八才より、十四五才迄の間は身體は非常に發育する故に其間に俄に發育を見ると云塲合があつて此時に音聲の調の變ずるのが能く分るのであります、感化教育にてはこの發育期に乘じて手段を施

せば多く實効を奏する事が出來ると信じて居ります其故に發育期の屢々來る少年は改良の實効を見る事が多い其發育期の甚だ稀なる者（十九才廿才以上）は實効が極て少ないと云事になります、この發育する時期は年の若い者ほど能く見えます、十五六才以下の小供は著しく分るものであります家庭に於て父母が子供を養育するに、子供が俄に内氣になつて物事におとなしくある事があり、また元氣がよくなつて何となく氣が浮立つた樣な鹽梅になる事がある、十四五の娘などが何かクヨクヨ物を案じて外出を好まぬ樣な事もある、子供と云ものは時々に變るものでありますこれが即ち前に申した身體の發育期に達し心意の變化する場合に臨んだのであります、此の時機には善い方へも傾き惡い事にも染りますもので、両親が油断をするとこの場合に飛んだ惡い事を覺える樣にあります、私が前に子供を教へる時期と申したのはこの時を指したのであります、でありますから可愛い子供を善良の者にしやうと思へばこの時機を誤らぬやうにして教へねばならぬのであります、ケ樣に言つた許りでモシ充分にお分りにならぬお方があらば東京感化院へお出下されば誰樣にもくはしくお話を致します

子供を教へる手段を二ッ三ッお話申しませう子供と言ふ者は餘り小言を言ては固よりいけません呵り廻したとてソレで善いと云事は決してない、呵ると云は罰則でありませう、罰則と云ものは法律で言へば云々のケ條を犯した者は此の罰則に照して處分すると云ふことで犯した者を罰するのであるが子供を呵る者は親の氣に入らぬト直ぐ呵り付るソレでは甚だ不當な話で先づ子供には常に能く教へて置いて其の教へた通りに守らぬ場合には呵

ると云事にせねばならぬ、教へもせずに呵るのは法律を發布せずして刑罰許り用ゐると同じ事になる、故に朝夕種々の事柄を能く教へて置ねばいけない、其の教へ方にまた種々の方便があるのであります、私が先年或女學校でお話をした「幼年教養手段」と云ふ談話の一節を左に述べます

子供を教へるには上手と下手では大さうに違ひますが、あなた方は何と思召ますか子供が無心で遊んで居るのを呼んで唐突に何か仰つたとて何の効能もないト云ふ事は御存じでありませう、釋迦が説法をするには必らず因縁を説きます、因縁の少しもないお話と云ものは何の効も奏さないと云ふ事は佛教者は能く知つて居りませう、私は常々いかなる因によつて話をすれば小供の精神に感ずるかと云ふ事を考へて居ります修身教授を掌る教師、家庭の教育をなす父母は平日この心掛がなくてはいけないのであります、例へて申ますと子供が庭の樹木に止つて鳴いて居る雀を見て居ると母親が其子供の樣子を見て居りまして子供より何か言出すのを待つて居ります、然ういたすと子供が、あの木の枝で雀が鳴て居ますと言ふとき、母親があの雀はなぜ鳴くのでありますかアレはお腹が空て何か食たいとて親の雀を呼ぶのです子供の聲を聞いて味い物をさがして持つて行つてやります、今に御覽なさい親の雀が來て味い物をやりますヨ子供の時は親に育てられますが彼の雀が大きくなると親の雀が年をとつてお婆アさんになりませうさうすると飛んで歩く事が出來ませんから今度は子供の雀が味い物をさがして來て親の雀にたべさせるのですヨ」と話をする斯云因縁について教へれば小供は能く感じます

男の子が辨慶の畫を持つて來て見て居るト假定します（辨慶には限らず誰の肖像でも）、母親が聞きます、それは誰の顔です何處の人と問へばコレは武藏坊辨慶と答へませう、その人は馬鹿な人ですかえらい人ですかとまた聞く子供は必らずコレはえらい人ヨそうして強い人だと賞ます、母親がその辨慶と云ふ人は唯強い許りではありません、強い人はいくらもありますが強い許りではいけないのでありますよ辨慶と云ふ人は學問もよく出來て然して義經と云御主人を大切にしました其でえらい人になつたのであります強い許りがよいなら角力などは皆な強いではありませんか學問もよく出來たり忠義を盡したりするので人がほめるのですと斯云工合に話をいたします

で日常の上に於て總てよき因を求めて、先づ子供に感覺を惹起させてソレより話をすると感じ方が強う御座ります私などは院の少年を郊外へ連れ出せば高輪の義士の墓を參拜させ其場で義士の話をする、三田の徂來の墓を見せればソコで徂來の話をする、刀を見せれば武士道の話をすると云やうに必ず話す塲合を造ります（以下略）

右にて大體お分りになりませう、さてこの實驗談もこれで一段落を付けまして局を結ぶ事に致します、ケ樣の家庭問題に就てお話をすれば際限もなく出て參りますから他日問題を改めてお話をいたす事にしませう

（終）



女禮心得草（四）

日本女學校
禮節助教授　大谷喜代子

人の前を通る禮

これは貴き人の御前を通ります時の敬ひの仕様で、只今は「人前を通る禮」とか又は「人の前を過ぐる禮」ととなへます、近世は「中禮」といひ、又「通り禮」といひました、正しくは「蹲踞」とてうづくまりすはると唱へましたのです

其致しかたは、貴人の御前を通る時に

〇上が上の時

御前のとほりに至りまして、御前の方の膝より突まして、次に下座の膝をもつきまして、兩手も膝と一所につきまして、つくばいまして、さて立あがりますのに、下座の膝より立てまして、すこしうつぶき、腰をかゞめながら、御前の通りをすぎまして、次第にますぐになりましてよろしいのです、膝をつきます時は、其つく方の足を、つかぬ方の足より半足ひきまして、つく方の膝と手と共につき、次につかぬ方の膝を是も手と共につきます、手は膝の前にすこし手と手と向き合ふやうに肱のはらぬ樣に目だゝぬ樣につくのです

〇同

兩方に御着座の時に、其中を通りますには、其上とある方の膝よりつきまして、右の如く兩膝をつき兩手をついてつくばいまして通るので、立つ時にも下座の膝からするのであります

さて只今稽古に致しますには、右のごとくいたしまして立ちます時に、下座の膝からたてます下が左膝の時は右の膝をたゝみにつけたまゝずらして左の方へと左膝がしらをたてながら左へひねりまして、さて立ながら、右の手を右の裾にあて裾の

返らぬ様におさへて、腰をかゞめて、通りすぎて、つねのごとく次第に歩むのです

○上の中の時

つぎには、貴人の御着座の方の膝のみをつき、手も其方のみをつきまして、通るのです、是をかたうやまひとまをします

この仕方と、前の上が上の仕方とは、立禮で、倚子によられた時でも、座禮と同じ事でよろしいのです、立禮だからとて、上が上の御前をすぎますのに、起ちながらすぐる事はなりません

○上の下の時

つぎには、貴人の方の膝と手をつくやうにして、つかずに立てすぎますのです

この仕方も、前と　じ事で、立禮にも此様にいたさねばなりません

今の立禮の教授法には立ながらする者がおほく、又立禮の教授法としては、すべてたちながらとなつて居りますのは上が上、上の中、上の下の、禮法の仕方が世間になくなつて居るのであります

此なくなつて居る證據は、世間の禮式教科書を見るとわかります

さてなくなつて居るのは、正しい教師について學ばないからでありますから、正しくけいこを御受のかたは、幸ひにのこつて居る眞誠の教授法を學んで禮法のなくなつて居る世間の風俗がわかるのです

○同しほどの人

同じほどの人の前を通るには、前の如くうづくまることはないのであります

まづ同じほどにても、少し敬ふ人の前をとほる時には、其方を見て腰をかゞめて通るのです、其次には見ながらそとうなづいて通るのですこれを只

今世間では、立どまりて、手を膝の邊までさげてこしをかゞめて一禮してすぐると敎へて居るものがあります、夫では上中下の差別かたちません、たしか是は私立禮法とかいふ敎師の敎へ方であります

○下の人

われより下の人の前を通るには、たゞむきて見たばかりて、すぐに通りすぐるのです、

○物を持たる時

物を持たる時は、貴人の御前なりとも蹲踞いたしませんで通ります、

是は重き物、こぼれやすき物などを持て通る時の事です此時は其役をはりまして、手わきにおりまして、立かへります時に、うづくまりずはりまして、前にのべました通りにいたすのです

かろきもの丶時、立居しましても障りのない物を持つ時には、下座の方の手に持直して、片手をつきまして、通るのです、其仕方はかはりありません

この人の前を通る禮法ひとつにつきましても、禮法を敎へる敎師の正しい方であるとか、小笠原流であるとか、正しくない方であるとかゞおわかりになります、禮法をおまなびの方はこの上中下の差別が敎授上の試驗問題であります斯やう申しましても吾代子などは何も存じませんので、只をしへられました事を御話しいたすだけでありますから、よい敎へ方と正しい敎へ方とを御存じの方々はおをしへを願ひます



産所式（續）

東京女學館講師　有住常子

燈臺の事は前にあげつ、次にはアヲヒエの事をいふべし、篦の事は、ふとき青竹を削て、長さ一尺二寸廣さ一寸二分にして頭を刀の切先の如くして半分より上を刄の如くにけづりたるなり、男子のときに用ゐる篦は、眞中にふしを置くべし、女子の時は、ふしなし篦を削る事は、夫婦そろふて子孫繁昌の者のつくるべき事としたり

但し逆竹をいむべし、竹の上下取ちがへべからず

胞衣つぐ物をヘラといひなすは誤りにして、ちかくは竹かたなといふあり、されど此名も後世のとなへにして、本名はあをひえといふべきなり、竹刀とかきて、あをひえと讀むべきなり

臍の緒つぐ事を昔の詞に胞衣をつくといふなり、今も其如くとなへなせり

篦の圖

男子の篦

女子の篦　　圖こゝに略す

さて是をけづるに、産前の用意なれば、男子の分と女子の分とを削りおくなり、男の分一本、女の分一本なり

臍の緒つぐ時、此へらにて臍の緒を切るまねをするなり

しかして、別人常の小刀にて切るべし、さて詞には、臍の緒を切るとはいふべからず、つぐといふべし、又臍の緒つく事を、胎衣をつくともいふべし、是は胎衣と臍の緒とつらなりてある物ゆゑに胎衣をつぐともいふなり

えなをつぎて後、へらも小刀も紙に包みて上下をりかけて、水引にて結ひ、えな桶の外家のふた

の上におきて、土にうづむるなり

裁縫（實修）

神奈川女子裁縫學校長　中村むめ子

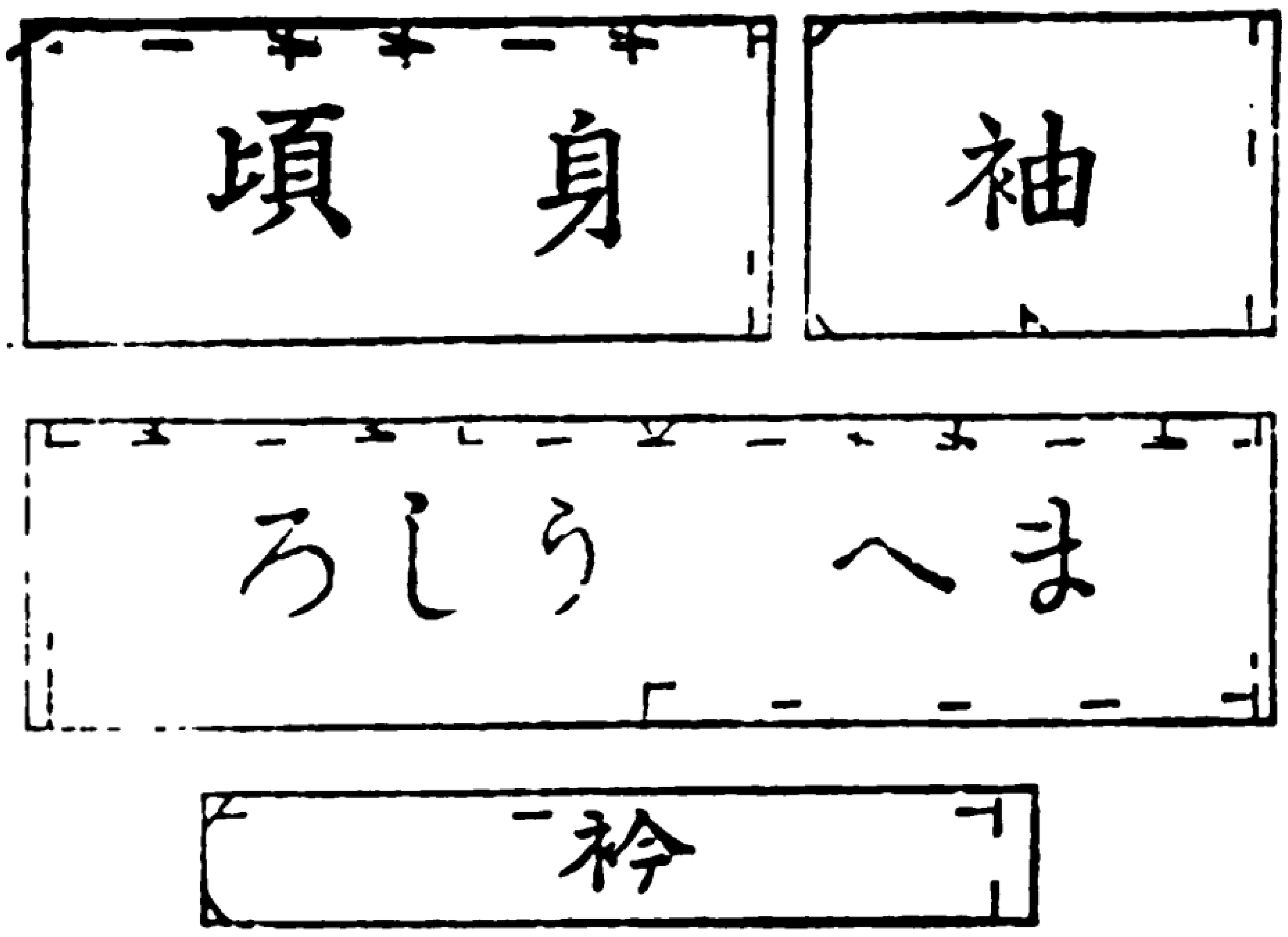
一つ身襦袢の縫ひ方順序

前號に一つ身襦袢の、裁ち方を申ましたから、今回は、縫ひ方のお話しを致さうと思ひますが、夫れに先き達ち篦の仕方を一通り申しますから、お聞き下さい

袖　前回に裁ちました左右の袖を、中表に二枚合せ、竪を二つに折まして、輪の方を自分の左に裁ち目の方を向ふにして、四枚正しく板の上に置き、輪の方の向ふ前に山篦をなし、次に前の方で、山篦から三寸五分と度り、其處に袖付の篦を致します、尚其篦の上に、斜に合ひ篦を致して、置くのであります、夫から袖丈を自分の向ふと、前と、中央との三ヶ所で五寸一分づゝに、極めて篦を致します總べて篦を致します時は、縫ひ上りの寸法よりは、一分づゝ大きく致して置くのであります

身頃　次に身頃の切を取りまして、幅を二つに折又竪を二つに折まして、衿肩を左に脊を前に、前身頃を下に後布を其上に重ねて正しく下に置き、衿肩の向ふの方で山篦をなし、其篦から三寸五分下りて袖付の篦をなし、其篦から又二寸下りまして脇明の篦を致します、それから身の丈を度り裾絎は五分の絎代に取ります、次に脇の裾口の篦から二寸上の方に馬乘の篦をして、此處にも合ひ篦を致します、次に身幅を一ぱいに裾口から順に肩まで篦をしまして、後身頃を左の方に除き前幅を裾口の方で一ぱいにして印をつけ、其篦を衿肩の角の處とに斜に定木をあてゝ、其間に二三ヶ所衿付の篦を致します、而して斜の長さを度りて置く

のです、但し裾絎の五分は除くのです
衿二寸幅二尺三寸の切を取り二つに折り折目を
左にして下に置き、折目の向ふ前に山篦をなし前



に度りました前丈と衿肩明の七分と肩廻りの一分
とを、加へましたものは衿丈でありますから、山
篦からそれ丈度りて篦を致すのであります、尚圖
を示しますから合せましたら御分りになりませう。
これで篦は終りましたから次に縫ひ方を示しませう。

豆腐料理（續）

割烹學校講師　石井湧太郎

ハンペン豆腐の拵へ樣

長芋をよき程に見はからひ、皮をむき摺卸して、摺鉢にて能く摺り、摺れたらば、同量の豆腐を能く水氣を絞つて、摺芋と合せ尚摺混せて夫れを程よく杓子にて掬ひ、美濃紙に包みて、湯煮するのである、是れを白玉豆腐とも云ひます、

緘豆腐の拵へやう、

豆腐の水氣を簾と簾の間に挾みて、少しおしを掛けて絞るのです、押はあまり重い物は用ゐぬので

す、夫れを小骰に切り、尚少時風に當て乾す、大概乾きたらば胡麻の油でざつと揚げて、味は好み次第にするのであります、

ふは〳〵豆腐の拵へやう、

玉子と豆腐と同量に混ぜて、よく摺りて器に入れて蒸すのです、調味は薄味をよしとします、

ヒリヤウヅの拵へやう、

豆腐を布に包み、水を絞りてよく摺り、葛の粉をつなぎに入れるので、あまり少量ですと固りません、其の內に皮牛蒡の針、銀杏、木耳、麻の實等を交ぜて、麪粉をころもにかけて、胡麻の油にて揚げるのです、

苞豆腐の拵へやう、

とうふをよく水氣をしぼり、醴を摺りまぜて、棒の如く取りて、竹簀に巻き、蒸して小口にするのです、



接待茶處

文學士　濱田廉

箱根といふ山をあん越えける、ところのありさまあやしく、尋常に變りけり、はるかに峰にのぼりては海を海り、谷にくだりては雨を踏む、

寂蓮法師家集

岩がねたかくかさなりて、駒もなづむばかりなり、山の中に至て水海ひろくたゞえたり

東關紀行

惟天設㆑險甲㆓東關㆒、

丙辰紀行

石出土谿櫺木坂、肩輿夢駭劍頭炊、

癸未紀行

今古箱根多ニ嶮峨一、就中猿汰馬蹄危、臂痠膓断斷石際、不レ見爪懸與瓠垂　同　上

樫の木の坂をこゆれば、くるしくて、どんぐり程の涙こぼるゝ　東海道名所記

相摸國箱根山の嶮岨はかくの如きものあり、健脚に衣食せし雲助の放吟せし追分節を聽け、

箱根八里は腕でも越すがこすにこされぬ大晦日と、箱根の峻坂はかれらが大晦日の苦悶に次ぎしを察する足るべし、されど開けゆく御代のならひとて、羊腸なす箱根八里を透迤りて、徒らに時日を費すの愚を學ぶものなく、車窓に逸居して、迥に二子山の螺鬟を指點しつゝ、笑談の裏に馳せ去るものから、函嶺の難路も、今は僅に地理書にそのなごりをとゞむるのみにして、一般世人の記憶よりはやう〳〵逸し去らんとす、よしやその難路は忘らるゝも、その山間には吾人の永劫忘るゝ能はざるものあり、そは春の如き温情の下に建てられし接待茶處これなり、

左箱根の關趾よりするも二十八町、右山中村よりするも二十八町、俚俗施行平と稱す、一望荒凉たる山間に一宇の白屋あり、軒頭榜して「せつたい茶處」と云ふ、前庭大竈を搆へ沸々たるもずやの煮音は、謖々たる松籟と相和應して、寔に脫俗の仙境なり、結髮の左翁慈悲の微笑を湛へて床其に踞し、征夫至る毎に、茗を煮て勞を慰むこれ店主彌左八翁なり、その行客を待つこと敦厚、野人を遇するも猶は貴賓に接するが如し、然れどもこれに費を拂へば固辭して受けず、容を正して茶處の由來を語る、その淸廉潔白なること、竹の園生の顯貴といへども、加ふること能はざるなり、

明治三十三年十二月、予學友四名と倶に學命を奉

して、駿河、遠江、三河、尾張の間に歴遊せんと欲し、二十四日故らに函嶺の峻岨を踰えてその勢を視蘆の湖畔に憩うて詩豪「スコット」の佳什を偲び、箱根關趾に懷舊の情を寄せ、箱根驛に弔古の涙を濺ぎ、やかて施術平を過りて所謂接待茶處を訪ひ、苦茗を啜りて、親しく彌左八翁と語る、この時陰雲凝りて日光霽微、萬籟死して靜寂太古に似たり、彌左八翁齒五十ばかり、紺木綿の筒袖、竪縞の袖無羽織、あやしげなる指貫、皆人をして太古の純樸を想はしむ、しかも童顔豊頰、眉宇舒暢し、言辭慇懃にして擧止悠揚、毫も田夫粗野の狀なく、その崇高朴茂なる風貌は、轉敬虔の念を惹起せしむ、一行乃ち禮を厚うし辭を卑うして、その來歷を原ぬ、翁破顔一番して徐にかたりけらく、

そもそも施行平の起原は、自て來る所遠し、疇昔德川幕府の時、西南諸侯の參勤交代せしものは、必ずこの峻路に出りしを以て、憩所をこゝに設け、大豆を煮て馬匹の疲憊を犒ひしが、維新の後、諸侯の上下歇むと共に、接待所も亦從て廢せられ、施行平の名空しくそのかみの面影をとゞめしに、常陸の人遠藤亮規、たまたまこのところを過ぎて、施行の美擧の絶滅をなげき、憩處の舊跡に因て、茶火を行客に給し、以て施行の名實を不朽に傳へんと欲せしも、身官事に繫がれて近江に赴き、卒に館舍を捐てたりしを以て、其門下三人その遺志を繼ぎてこの茶處を設け、連綿として今に至れり、その一切の費用は左右兩村の支辨する所にして、敢て賓客の謝儀を受けず往年　小松宮殿下もこゝにやすらはせ給ひしかど、御茶代はひたすらに辭したりとぞ、竈上の銅釜にその設立の來茲を刻すその文に曰く、

廣爲ニ道友一鑄ニ此器一、永充ニ施行平聽所之用一、

下總國香取郡長部村　八石性理敎會所

明治十二己卯年七月　花押(規方)

遠藤亮規性理の學を究め、性理敎會の敎職とある、又儒學を喜んで王陽明に私淑し、實踐躬行を主とせり、その門下三弟子は倶に小田原の人にして、一茶處を管せしが、不幸にしてその二人病歿し、一人は下院の議員となりしを以て、彌左八翁遠く常陸より來て主管とありぬと、翁も亦遠藤氏の門人なり、恨むらくはその姓氏を逸せしを、

噫世道日に溷濁に陷り、人心漸く非薄に流れ、擧世滔々として爵祿に迷溺し、名利に臨めば父子昆弟の義を忘るゝもの多し、唯寥廓たる寒鄕、逈に塵寰を超絕して、淸廉高行翁の如きあり、闇黑々の裏一閃の光明を睹るが如く、社會の良心の未だ全く沒滅せざるを覺る、以て聊か人意を强うするに足るなり、吾人素と翁と恩義雅素なし、たゞ一碗の苦茗を受くるの故を以て、漫に阿諛の言を弄するものとなすことなかれ、方今筆を載せて函嶺を橫絕するもの幾何かある、遠藤氏の仁情、三弟子の義心、彌左八翁の高行誰あつて世間に紹介せん、吾人固より文筆の人にあらずと雖も、この隱君子をして空しく山間に老死せしむるに忍びず、敢てその淸行を說くことかくの如し、

留まること半時ばかり、辭して店を出づれば、暮色蒼然として、雲淡く風絕え、二子山旣に沓靄の裏に隱れて、新月將に西峰の巓に落ちんとす、四顧寂寥として名利の聲到らず、宛然無何有鄕に在るが如し、一人微吟して曰く「騎レ牛遠々過ニ前村一、短笛橫吹隔隴閑、多少長安名利客、機關用盡不レ如レ君」と、旣にして月は盧淵に沈み、六合暗昧にして咫尺を辨ぜず、山中村に至りて、一漁夫の三

島に還るものに遇ひ、その燈火に倚て行く〳〵函嶺の形勢を語る、漁夫も亦頗る彌左八翁の温厚にして潔白なるを賞して已まず、街巷の匹夫元來才識なしと雖、仁義の人心を感動せしむる深しと云ふべし、七時にして辛して三島の逆旅に投ず、今やこの稿を草するに方りて、遙に思を函嶺の暮雲に馳せ、切にこの隱君子の清適を祈る、

女子服飾の沿革（承前）

稚園信成

衣服に就ての制度が度々發布に成つた事は前回までゞ御分りでせうから、この次ぎは此時代の衣服は如何なる者で在つたかと云ふことを一括して述べませう、併しながら、同じ奈良朝時代と申しましても、何分數百年も經て居ることでありますから、其内には時代々々に依て數多の變遷も在り、又身分の尊き人と卑しき人、位の高い人ひくい人とに依て多少の差異はありますが、先づ全体を一まとめにして見ますれば、次に示す繪の通りであります。



貴婦人（垂頭着用圖）

先づ圖に示しました通り、體の上部には衣があり、

下の方には褌をつけ其上に上裳（袴也）があるが、其に細くあつて、後世の我が邦の服よりも、寧ろ現今の支那服に似て居たのである、之を着用しまするには、第一に褌をつけ、次に上衣、次に褶帶次に上裳と云ふ順序であります、上裳即ち袴は此時代尊きも卑しきも、おしなべて赤色を用ゐたもので、紅袴は此頃より下女と雖も着用して居たのであります。帶も又いろ〳〵あるが多くは高麗錦を用ゐて居た樣子である又此他に組帶と云ふものも在つた、何れも其巾はせまくあつて、後世の紐の樣に、一重或は二重回して前に結び、其兩端をば長く垂らして居たのであります、

衣服の袖は一樣には云へぬが、概して貴人の着用して居るものは稍長くあつて、手くびより六七寸位ゐ出て居つた、然るに元明天皇和銅元年に至て左の如き詔が下つた

今より後は衣服の袖口の廣さ八寸以上一尺と定めよ併し人の大きい小さいに依て多少の相違はあること故此以内に於て作るがよい

此時に至て始て、衣服の寸尺が定まつた。同五年又左の如き詔を發布された曰く

諸司の人々等の衣服の作り方、袖は狹小にして裾は甚だ長い。又衽の相接するのが甚だ淺く、夫れが爲に、道路を步行する際、肉體が顯はれ易い、此の如き服は大に無禮であるから、宜しく所司の人嚴重に禁止を施行せよ

次で寶龜二年に至り、服製に就ての詔を下された、曰く

袍の袖口の濶さ、五位以上の人は一尺、六位以下は八寸と定む、婦女も亦此制に準ずべし

以上の詔を以て見ましても當時袖口の狹かつたことは明白である、襴は古へは無いものが多かつ

たが、此の末になりましては之を付ける事が流行する樣になりました。概して當時の服は裾が大に短くて、袴の襴は常に表はれて居たので在つたが、漸次其丈けも長くなつて裙は地に引く樣になり全く唐風に改まつたのである。

併し國中悉く改まつたと云ふではあるまい、始は只尊い人達が外出の時にのみ、唐服をつけ、宅にかへれば、元のまゝの衣をつけて居たのである、處が段々に朝廷からも奬勵され、世間にも之を着用する人が澤山出來たものですから、やうやうに一枚作り二枚作りして、終に一般に着用する樣に成たのである、斯くして一家内悉く改むる樣に成たのは、隨分數多の年月を經過したのでありませう。

斯く何事も唐風に改められたが、尙は左衽の事だけは久しく改まらなかつたものと見えて、養老三年に禁令を發布された。そは續日本紀に壬戌初令天下百姓右襟と云ふ事が見えて居る。此時から一班に右衽にする樣になりました、

襟の事に就ては此前に申すつもりでしたが、云ひおとしましたから一寸此處であらましを記しませう、元、襟には太古以來上頸、垂頸の二種在つた、而して何れも左衽で在つたのです、處が、三韓と交通する樣になりましてからと云ふものは、專ら彼國の風を慕ひ、我邦在來の左衽の風は、夷狄の慣習であつて、甚だ見苦しい、かゝる野蠻の風を堂々と上に立つて居る處の官人が平氣で致して居るのは、支那人に對しても耻かしき次第である等と、勝手な理屈をつけて、續々右衽に改めた。又朝廷よりも屢々令を下して右衽に改める事を進められた、處が幾久しく續いて來た事でありますからして、下々の者は容易に改め樣ともしない、又

朝廷よりも遂には強て改めさせ樣ともしなかつたのである、されば此當時は、貴人は右袵、卑賤の

左袵の圖



者は左袵と、自から區別した樣に成て居たのである、然るに元正天皇位に即かれまして、此風を厭ひ給ひ、養老三年悉く右袵となすべきの詔を下されました。何れにしましても利害のないことでありますから、誰するとなく右袵を以て一般の國風とする樣になりまして、當時代の末に至ては左袵は全く絶えてしまいました。

しひがたり（その二）

本居若水

女の、かるたとりたるはよし。小倉百首、伊勢、源氏、古今の歌などいづれもめでたし。詩がるたは、少しことごとしきかたも有れど、猶こそあれ。トランプも。唯此の頃、世にもてはやすなる繪のみのかるたは、いとうたてし。ひる過ぐる頃或街をすぎしに、先に行く年若き娘たちの、互に琴、ピアノ、など品評しあへるを聞きて、何處の家のまな娘なるらんと心にくかりしを、やがて、芝居の前に立ちどまり、こたびは、わ

ざをぎ人の品評とはなりにけり。はじめの品評のみそぎゝて、とく行きすぐべかりしを。

女どち道を行きつゝ、すれ違ひざまにあと振りかへり、髪かたち、衣の品、はき物などとかう打ち見やるならひは、いと〳〵いやしげなり。見らるる方はよし。

女のいさがひする様こそ、物にも似ずいとおもしろけれ。互に云ひのゝしる程のかしがましさは、小雀の囀りたらんやうなれども、それもやう〳〵云ひ盡きぬれば、かたみにするどき眼じて睨めかはす様、こたびは、荒鷲にやたぐへつべき。あはれかゝる折にぞ、學びの親の鶴の一聲はあらまほしき。さて云ひ勝ちたる方は、おのづから面の色晴やかになりゆけど、まけたる方は、やう〳〵眼の内もうち曇りて、をり〳〵は口の邊、電光のやうにうち震へるは、やがては雨にやならんずらんかし。

年老いたる女の、神の御前にいく度かぬかづきて、をろがみ居たるを若き女の袴着たるが、三人四人かたみにあざみ笑ひつゝ過ぎ行きしこそ、いと憎くかりしか。

思ひもかけぬ山里にて、清げなる少女の、草の花など摘み居たるを見出でたる。かやぬ姫の神や、天降りましけんと覺えて、うるはしとは見る物から、かつはいみじう畏き心地さへせらる。はた、冊子くりひろげて、こと心も無く見入りたるなど、をかしとは世の常なりけり。

語りつゝ物食ふ事、胃の消化を補ふ由にて、醫師もすゝむる業なれど、何にまれ、口に含みつゝ物云ふは、いと卑しげなり。まして、高らかに打ち笑ひて、噛み砕きたる物の口の内に見えたるなどは、云ふも更なりや。女は、わきて見苦し。

女の眼鏡かけたるは、少しうとましけれど、それも、眼のあしき人は、せんかた無かるべし。眼にあしき節もなくてかくる習ひは、念じてとゞめたらなん。男も。

いにしへのは更なり、今様のも、物語文は、能く心して讀むべきなり。物語とし云へば、よきを勸め、あしきをいましむる文だに、かつをかしげに書きなしたるものなれば、よむ人の心によりては、あらぬ方に引きつけても見ば見らるべし。まして、一向にたはれたる方のみ、しるしたらん文どもをや。

嫁ぎたる女の眉剃る習ひは、とゞめたらんぞよき。うすしとて嘆く人だにある世に、おのづからある粧ひを心なく剃り去るべしや。いらぬ毛ならばこそあれ、眼をまもるものとも聞くなるを。歯ぐろめもまた。

水莖のあと拙からぬは、誰も心ゆく習ひなれどことに女は、唯この道の麗はしかりなんぞ、一きはゆかしかるべき。ふりはへての消息は更なり、たゞかりそめに書きすさびたる反古どもさへ、よき手のは、如何なる姫のかくおかしくは書きなしけんと、いと心にくし。それも、この頃の或姫が消息のやうに、片假字といふものを交へ、男文字厳めしうかき續けたるは、あたらよき手も、すこし興さむる心地す。

學校の徽章と云ふもの男は皆帽子につけたれば、何處に通へる人なるか、一目見てすぐ知らるれど、女はつくる所無ければにや、此の事行はれぬぞ、物足らぬ心地せらるゝ。古への世の首玉と云ふ物に思ひ合せて、美しき紐組などを、襟に懸けたらばいかに。定まりたる色のリボンにて、花の形などつくり、胸につけんもをかしかるべし。と

まれかくまれ、この事早く、世に行はれたらましかば。

白く細やかなる指に、指輪唯一つ、目立ぬ程にさしながら、さすがに、世の常ならぬ石の光の、折折にきらめきたるは心にくし。數多くさしたるはこと〴〵しくて、なか〳〵に、あさましき心地もせらるべし。袴はきたる女のは、まして。

女は少し包ましき方のあらんぞゆかしきや。忍び音に泣きたる、少しうち笑みたる、いさゝか腹だちげなる、いづれもいとあはれ深し。聲あげて泣きいさちたる、高らかにうち笑ひ興じたる、まして、ことの外にいかりたるは、あさましともあさまし。

女の詞多きは、うるさし。あまりに少きに過ぎんも憂かるべけれど、多きには勝りたるべし。

花がたみ（第二）

白松園主人

かくいへば、目ならぶものさへあき心地すめれど、こゝにかき出づることはしも、浦曲の磯菜、岡のべの若菜のみにもあらじ、長き短きつく〴〵しをはじめ、根芹もあるべく、菜種の花もあるべし。こは、ぺん〳〵草よといへば、げに口にまかする漫言の、すゞしろ草にまさるほどのあぢは、よもなかるべし。暮るゝ日おそく風ゆるき、漁村の柳の木の芽もはるの花がたみ、妍醜共に云ふにも足らぬを、つみて入れぬる、はかなきすさびぞかし。

・・・・・

◎疾視反目

疾視反目の結果は、君子も往々常識を失ふに至ることあり、余嘗て安齋隨筆をよみしに、徂徠一派

の學者が、支那崇拜のあまりに、頻りに名分を誤るを憤りて、之を論難詰責しつゝ、その極

唐々と口はきけども愚者〱と
　くされた儒者は唐人の屎

とまで、痛罵せられたるを見て、温厚なる貞丈翁の口つきに似ぬものかなど、ひそかに思ひたりしが此頃折衷學の首唱者、井上金峨の病間長語を見るに、げに徳川時代の儒者は、徂徠一派あらでも、かくも常識を失へる國民なりしにやと、あさましく思はれぬ。彼は開卷第一に颺言して曰く「われ、今日に至るまで、一の長所あるに非ざれども、身を華人に混ずとも、口舌を去つて手指を用ゐば、何の不自由なることも有るまじと思はる……我邦の學者は、老人に及ぶまで、身の華人に成り得ぬ者多き故に、斯は云ふなり」云々、また「源語、勢語、何のためあらむ、淫を導くには宜しと見えたり、人世の無常は斯く云はぬとても、云ようはあるべきに、猥雜なる事と覺ゆ、これを讀まねばとて、婦女子の村婆子のように、あることもあるまじ」とて源氏、伊勢等の物語ぶみを排斥し、歌學者、國學者等を嘲りて、ちと四角な文字もよみ給へ、など云へるを見れば、その偏見誤解おどろくに堪へたり、貞丈翁の怒り罵られしも、ゆゑあるかなと思はれぬ。

◎六分女四分男

見た京物語といへる書に云く、京は六分女、四分男たるべし、夜も若き女ひとりありく、男女連れ立ちてありくを、少しもわるくち云ふものなし云々と、今日といへども、なほ此の風はすたる事なし、女六分といへるは、女の人口多しといふ意にはあらず、物見遊山を始め、市中を遊びありく女の殊に多くて、こちたくそうぞき立てゝ、ね

り行く女の、人目を引けるをいひしものなり。余昨年秋の末つ方、所用ありて京都にゆきし折、友人にあひて清水に詣でしに、紅葉見むとて、棧敷を構へたる上に、男女の溢るゝばかり居たるが、中には妙齢の婦人殊に多く、目さむるばかりの綺羅を盡して、派手やかに裝ひつゝ、往來の人のうちながむるを、面はゆきけしきもなく、平然として飲食するさま、かたはらいたかり。これ蓋し古よりの風俗なるべし、但し歐洲の新空氣入りてより、東京などは、夫婦ならずとも、男女のつれだちてありくは、大流行なり、之の物語によれば江戸時代には、さる風なかりしさまなり。之の風あしといふにはあらねど、濫用すれば風紀廢頽の源由ともなりなんかし。

◎曲亭馬琴の江戸婦人評

曲亭馬琴、北越の鈴木牧之と云へる人に、その子（宗伯）への嫁の周旋を頼み遣しける書中に曰く（此の頃日本新聞に見えたり）

……相應の嫁ほしくなり申候、甚だなれなれしき申條なれども、御地にて貧家の娘、江戸住居望の仁等御聞きいだし被成候て、御しらせ奉願候、貞實にて候へば、外に望無之候、江戸市中などの娘は、なかく＼にはすばに育ち候故、安心不仕候、とかくすぢよく、そだち候、すなほの女子ほしく御座候、格別御懇意につきをこがましき事まで、申演候、書外御賢察可被下候不具

江戸娘を蓮葉と稱し、田舍そだちの娘にて貞實なれば、外に何の望みもなしと云へる處、さすがに曲亭翁の眼識といひつべし。特に貧家の娘といへる語、味あるかな。

◎朽木不レ可レ彫

昔謠曲の觀世流の達人なる大夫ありけるが、道中にて隣家に謠をうたふ者ありけるを聞きて、連の者にかれを止めさせて見すべしとて、一曲謠ひ出しければ暫しのうちに、果してかの方の謠は止みぬ。又或宿にて謠ふ者ありけるに、前夜の事をいひ出でゝ、前の如くにせられよと望みければ、大夫云ふやう、是はとても叶ひがたし、いかにとなれば、さきの謠は甚だ上手の人なりし故に、我聲を發すると共に、此方を細に聞き、自分を耻ぢて止みつるなり、今夜の謠は、他の善惡を聞きしるほどの業にあらざれば、何程此方にて謠ふとも、通せざればすべきやうなしと答へしとぞ。此の言まことに至言なり、大聲は俚耳に入りがたく、常識の欠けたる者に、いかほど道理をもてするとも、つんぼ同樣なるべし、生醉はなほ覺醒すべし、沈醉して前後不覺の者に至りては、馬の耳に念佛ならむ。

（以下次號）



樂園

小説　むら心

さち雄

（上）

お秋は恁う思つた。

何うしてもお父樣やおッ母樣は上京を許して下さることはあるまい、正面から說いても、側面から訴へても、何うしても聽許ては下さらぬ、してみれば、もう言ふ丈が冗な咄で、此上は自分の決心一つである。決心?、それはもう一年も二年も以前からで、依然動かすことは出來ぬ、如何考へ直

しても此儘田舎で朽ち果るのは殘念である、お父樣やお母樣は女の子を教育と謂へば、茶や生花や琴三味線などに限つたやうに思つて居られるが、何うしても私は手頭で習熟ふことよりも、もつと意味の深い、思考のあることが習熟たい、文學も可、美術も可、女子として優美な思想を修養ふには是非其等のものが必要である。決して生意氣にならうとは思惟はぬ、又學問をして鼻端に掛けやうとも思はぬ、自分の嗜好な事を飽迄やつてみたい、同じ女子に生れながら、東京に居れば、良教師に從いて、進んだ學問が出來るのに、田舍に生れた爲に、講義錄の端緒や雜誌の一片を覗いたゞけで、系統を立てゝ學ぶことは夢にも出來ぬ、のみならず、偶に書冊でも讀で居ると、直ぐ用事を仰つたり、糸竹の復習などを八釜しく言はれる、勿體ないが其同情の違つて居るのはお怨めしい、

これからの女子は那樣ことでは肩身が狹いのだもの、お察しのないにも困る、何うしても東京へ行きたい、東京へ行て新しい學問が爲たい、さうかと云て無斷で家を出で、東京へ行たらどんなに心配をなさらうか、腹を立てられやうか、許しては下さらず、自分は何處までも行きたいし、實に何う爲たら可のか、了解なくなつて了ふ、男なりやそれはもう造作なく飛出してでも行くだらうが、女の身で那樣お轉婆な眞似が出來やうか、併し又突飛な方法でも、思ひ決て行て了へば御兩親とも、反省して許して下さるかも知れぬ、夫程迄に思決て居るならと云ふやうな譯で、或は二三年の留學をお許し下さるかもわからぬ、一時は不孝のやうであるけれども、雨降て地固るの譬で、後來の僥倖になるかも知れぬ、決心して行てみやうか、百里の旅途を單身では大膽だけれども、恰當春枝

さんが行かれるのだから、殊に春枝さんは非常に私に同情して呉て居る、途中は險呑なことは無い、只一時でも無言て家を出たら、さぞ喫驚なさるだらう、それが實に濟まぬことだ、東京へ行てから手紙でお詫はするけれども僞すやうで、氣に濟まぬ、出入の者や、親類の人は騒ぐだらう、私の始終言て居ることは、皆熟知て居るから、そんなに怪訝は爲まいけれど、心配は爲るに相違ない、追手などかけられては面倒だが、それには整然と書遺して狼狽ないやうに爲て置う、なに十五六時間さへわりゃ何時でも戻られるのだもの、遠いの何のつて言ふのは間違つて居る、さう決定やう、春枝さんの許へ行て、委しいことは相談することにして。

お秋の家は大阪近在の酒造家である、父母とも昔氣質の、兄弟とては男許りのお秋一人、蝶よ花よと愛でいつくしみて育てたものを、如何に學問が好きだからと言て、何うも手放して東京に遣ることは肯んじなかつた。けれども又お秋の熱心は格別なもので、一種の東京病に罹つたやう、囈語にも言はない斗りである、それを兩親が制するほど反撥心は強くなつて、無斷でゞも行かうと迄決心したのである。

お秋は容貌はそんなに美形と云ふ程ではない、性質は温順て無口の方である、只物に熱すると嚇とする方で、幼い時にでも、親の手にもかゝらない程の肝癪を起した事もある、その代り又涙もろい所もある、平生は到つて沈着で、所謂はねつかへりではなかつた。

行かうと決心したのであるから、友達の遠山春枝と云ふ女を訪ねた。

春枝は學び友達であるが、氣質は少し異つて居る、

お秋よりは活潑で、向不見で、能く辨じる方で、年は一つ上だが學問はお秋ほど好きではない、其叔父なる人が東京で、某私立女學校の講師とかを爲て居ると言ふので、畢竟春枝は公然許可を得て其人の許に修業をすると云ふ譯なのである。

春枝は少なからずお秋に同情して居る、從つて其兩親が東京行を許さぬと云ふ事には大に憤慨の意見を洩らした、春枝は東京の修學の地なることを説いて、さなきだに燃えて居るお秋の情に油を添へ薪を加へたのである、お秋が無斷で行かうとまで決心したのを非常に贊成して、自分も共々其手段を考へた。

兎に角後事は凡て手紙で纏めることにして、お秋と春枝とは相携へて上京することに極めた、勿論それは大秘密を守つて、先づ春枝は見送り人や何かゝあるから、同じ停車場からは乘らないことにして、其次の停車場でお秋と逢ふ約束をして、素より時間なども整然と打合せて置いて。

此場合に於けるお秋の心には家族と云ふ觀念もない、故郷と云ふ觀念もない、情の面は殆ど意志の爲に蔽はれて、功名心――と云ふ程でもないが兎に角、美しいやうな、面白いやうな、賴母しいやうな希望の影が眼前にちらついて、後の事などは殆ど省みる間際がないのである。

(中)

お秋は京都迄どうして來たのか分曉らなかつた、やッと驛夫の呼聲に京都と知て、少しは自分の心持に返つた、

高槻山崎の邊は何うして過たらうか、何うして汽車に乘て、何うして茲へ腰を掛て、何うしてこれから百二十里の旅を行くか、只もう夢中で、四邊の景色や、車中の人間や、汽車の響や、人の談聲

や、見えて居ても、聞えて居ても、宛然別の世界の現象のやうで、自分は只から單ら淋しい心細い野徑を辿つて行くやうで、偶ま春枝が話端かけても、口頭だけ返辭をして、何を言て居るのか分曉らなかつた、

汽車は京都を發した、此處ではさすがに下りる人乘る人も多かつたと見えて、新しい顏が增加たやうだ、お秋の向ふ側に腰を下したのは四十位の婦女で、小さな靴、手布などを用意して居る處をみると長旅をするらしい、

『御免なさいまし』

とお秋に會釋した時、お秋は初めて身、衆人の中に交つて遠くへ行くのであると云ふことを覺つた、それはいくら春枝の聲を聞ても、常に聞慣れて居て、別に旅情を惹起すと云ふ場合には到らないが、只知らぬ他人に聲を掛られて、漸く旅の心持になつたのである。

素よりお秋は一人旅に出たことはない、奈良へ見物に行くとか、須磨へ保養に行くとか云ても、常時阿母さんなり阿父樣なり隨いて行く。それが思立つにも東京と云ふやうな遠方、而も家を拔けて心安からぬ旅の、そゞろ心にあつたのも無理はないのである。

お秋の胸には二個の事情が糾紛がつて、それが今縺れ綟れて殆ど解く術がない、即ち一つは目的、一つは手段である、目的の爲には手段を問はぬと謂ふことは誰しも能く言ふことであるが、實地の場合に當つてみると、果して其解釋通りに行て良か否か、容易に判斷は定き難い。學問と云ふ目的は良、併し其目的に爲に、許しを乞はずに家を出で、親の意に背くことは何うであらうか、手段としては確かに穩當ではない。或は男子であつた

ら又、身を立て道を行ひ名を後世に揚て以て父母を顯はすは孝の終なりの本文通り、細節に拘泥はず、此場合に素志を果すのも、あながち不良行爲とも限らぬ、只女子であるだけ、世間の手前や一族の間に、憎むべき奴として今後もう自分を見放して了ひは爲まいか、それでなくてさへ父母在しては遠く遊ばずと謂ふものを、自分勝手も此程無鐵砲な事はあるまい、全く自分は何者かに魅せられて居たのだ、阿母樣は今時分だうして居られるだらう、家内の者も嘸騷いでるであらう、屹度人を方々へ馳らせたり、誰か追手に行けと命令ていらつしやるかも知れない、それとも亦あんな我儘者は、困らうが悲まうが關はずに置けと、阿父樣なぞは大變に怒つていらつしやるかも知れん、細細と書いて置たのだから、其書を見られたら、大概私の意向も解るではあらう、けれど今は只私の居ない事に氣を奪はれて、阿母樣は屹度直ぐに連て歸れ探し出してと、焦慮ては下男などを叱つて居られるに違ひない、那樣信神家のことだから、間違のないやうにとお參詣にも出てゆかれたゞらう、濟まぬ事になつた。

阿秋の心緒は全く紊れて居る、傍に居ては爾もないが、鳥渡離れてみると、親の難有味が染々と胸に沁むのである、家内中の者が立騷いで居る狀況や、兩親の心配さうに相談して居る顏容などが、眼前に泛んで、今更無謀なことを爲たと後悔の念頻りに催すのであるが、汽車は一刻々々都の方へ近づいて行く。

お秋が斯く想像を馳せて、吾家の事ばかり考へて居る間に、連の春枝はまるで反對にて前途の事ばかり胸に描いて居る。東京の繁華なこと、學校の狀態、學生のこと、これから自分の爲る學問の方

針、それよりか先づ一刻も早く新橋に着きたいと云ふ念が充満て、半は功名心、半は好奇心、理由もなく都戀しさに勇んで居る。

向側に腰掛て居た内儀さん風の婦女は、二人の容子を熟々と眺めて居たが、お秋の物思ひに沈んで居るやうな樣子を見て其方へ向ては別に咄かけは爲ぬが、春枝には馴々しく言葉を交して居る。

「只今では婦女の大學校も設立と申し升から、國國から修養に上京なさる方もさぞ多いことでムいましやう、貴孃方も矢張其大學校の方へ孰れ這入になるのでございましやうね。

「ハア、孰れ大學にも入學致しまする心算で居ります。

「それはだうも結構な事で、貴孃方は確乎とした御兩親もいらしやいまして、學資も充分に有て爲さることですから、誠にお宜いことでございますけれど、仲には異種がございまして、隨分飛んだことになるのもございます、ハイ、私の知て居る人にもです、氣毒な際に遭たのでございますよ。

「矢張女の方で、勉強にいらつしつて。

「勿論勉強に參たのでございますが、終には勉強處ではない、飛んだ騒ぎを惹起しまして、ハイ、ハイ、難有うございます。

春枝は自分の蜜柑を三つばかし分て其婦女に與へた、自分も亦蜜柑を剝きながら。

「お食んなさいまし。

と勸めた、

「何と云ふ學校にお通ひでござんしたか、其方は。

春枝は又改めて問直したので、婦女は一寸考へたが急には臆起せんといふ體

「何と申しましたか、今急に口へ出ませんが、何でも、繪や何かを敎へる學校ださうでございま

す、それにしても何でござい升ね、親といふ者は結構な者じやございませんか。

親と云ふ者は結構な者じやございませんかと、句を切て言たので、今迄茫然と考へて居たお秋の耳に、其が力の籠つたやうに聞えた。其一語がお秋の胸には異様の響を傳へたので、吾知らず其婦女を方を顧盻ると、

『貴孃も御一緒に、矢張修養でございますか。

と訊ねながら、枝春とお秋の顔を見比べた。

汽車は早くも近江と美濃の國境を馳るので、左の方には天を突くやうな膽吹の山、頂上には一團の叢雲が覆つて、恰當烟を吐いて居るやう、其餘の低い山は、峰に峰が重なつて、見ゆる限りは荒漠たる野原である。



樂圖

田舎荘子

金津常十郎

木兎の自得

鷹、木兎に謂って曰く、汝を見るにその形をかしげにして、丸きつらに、小さき嘴あり。頭巾鈴懸を着せたらんには、小人島の、天狗などともいひつべし、大きなる眼ありながら、晝はあきめくらにして、日輪をさへ見付得ず、うろ〳〵として、諸鳥のために笑はれ、夜は藪の中にかゞみ居て、寢とぼけたる小鳥をとりて喰ふのみ、づくまわしの手に渡り、種木につながれ、糸をつけては、折々ひかるゝとき、ばた〳〵とうろつく躰、諸鳥のわらひも、ことわりあり、憖に汝も四十八鷹の内なれば、嘸口おしく思ふらん、われ汝がために、汗を流すといふ、」木兎頭をふり、嘴を鳴し

て曰く、鷹どの、大きなる御了簡違ひたり、天地の間には、空を飛ぶものあり、木に巣むものあり、地をはしるものあり、水におよぐものあり、美はしきものあり、醜きものあり、皆それ〳〵に造物者の命を受けて生れ來るものなり、自分々々の物好にて、如斯あるにはあらず、もしわたくしを以て、自由にあることにならば、誰か一人不自由なる形を受くるものあらむや、わがおかしげなる姿にて、晝眼の見えぬは天性なり、造化のなすところ、豈わたくしを以て、免ることを得んや、その上、うきからうじは藪中を家とし、蝠は、さだめの中に住居す、彼等はこれを以て宮殿樓閣と思ふらん、蛇には足なく、蚯蚓には目鼻もなし、されども、皆相應に、用足ると見えたり、造化の物を生ずること、皆それ〳〵に食と居處とを、授けて迷惑せぬ程に、產附らるゝなり、分を越えて、

他を羨むは、天に叛くなり、われ晝は眼見えず、といへども、夜に入りては、用の足る程は見ゆるなり、故に藪の内を探して相應の餌を求め、又餓死に及ぶ程のこともなし、小鳥ども、われを笑ふは、わが形のをかしきものならんと思へば、さのみ腹立つ程のこともなし、彼等何程笑ひたればとて、わが邪魔にもならず、笑はれて居るまでなり、われ鳶烏の如く、人家に害をなすこともなく、鳫鴨の如く、人に賞味せらるゝものにもあらねば、探し求めて、我を捕ふるものもなし、たま〳〵づくまわしの人、われを捕へて種木につなぎ、小鳥等に見せて、わらはするも、意趣あり、われを憎みてするにもあらず、小鳥をあつめて、捕へんためなり、これまた、世につらなる不肖なれば是非なし、そのかはりには、鼠にても殺して、われに喰はすれば、われ骨おらずし

て食につくなり、さていらぬ時には追散してやらるゝまでなり、御身は生質氣高く身持も奇麗に威儀備はりし鳥なり大名高家の拳に上り諸人の馳走も他に異なり、しかれども、野に出て、鳥を捉ふるの苦勞は、我よりも甚し、捉得て全くわがものにもならず、大鳥に出合ては、やゝもすればたゝき落され、不巧者なる鷹匠の拳にては思ひもよらず、胸をつき、非業の死をせらるゝこともあり、足革を附けて、とやにつながるゝことは、われも同じことなり、こゝに一本の木あらんに、伐りて半分は香盆に作られ、蒔繪金貝結構に飾りて、床の上に置き、貴人高位の翫器になり、其半分は木履に作られ、泥の中へふみこまるゝ、其形を見れば、尊卑各々別なれども、木の生を伐らるゝことは同じ、ちやふげん坊といふ鳥あり木兎を憐みて曰く、汝を観るに、その形、うるはしとは、いふべからず、しかれども、頭あり、尾あり、翅あり、足あり、耳鼻嘴あり、鳥の全體備りて、かたわものとはいふべからず、晝は眼見えずといへども、夜は蚤をとる程の明なり、多く鳥類を見るに、鳶の羽さけて虱多く棲む、鷺の嘴諸鳥に類せずして、しかもその形、汝よりも不調法なり、鶉には尾なく諸鳥これらをわらはずして、汝のみを笑ふ、汝その形醜く、その心拙くして、四十八鷹の部に入りたる故に、諸鳥嫉みて、汝を笑ふか、且は前生の宿因か、抑當時の不幸といふものか、いかさま不愍なることあり。木兎が曰く、われその故を知らず、しかれども、その質ありて、人この名を與ふと、老子もいはれたり、しからばわれにをかしきことありて、小鳥等の笑ふとみえたり、われこれをいとふべきことにもあらず、四十八鷹の部に入るといふも、われ好みてなりたるにもあ

らず、小鳥にても捕へ喰ふゆゑに人鷹の名を付けたるなるべし、強ひて辭すべき程のことにてもなし、われ笑はれて、人のためになるは木兎の職分なり、われを捕ふるものは、われを養ふなり、人に養はるゝものは、おのづから、その勤めあり、われまた少しく、恩を報ずることなからんや」

村岡勤王談（承前）

森林黑猿

前回に演べましたる水戸家に密敕の降りし事を詳細に講演しまするには中々長くなりまして數十回に渉りますし殊に本編は村岡の傳記なれば成るべく他の事に渉たらぬ樣にしなくてはなりませんから簡略に述べ置きます此の密敕は首尾能く水戸殿の御手許に達する事を得ましたが是より先大老井伊候は其臣長野主膳を京師に遣り密かに朝廷の御模樣を搜り併せて勤王有志の擧動に油斷なく注目して居りましたるゆゑ速くも此の密敕の降りし事をも探知してそは容易ならずと閣老間部下總守に命じ京都に手入れをし。

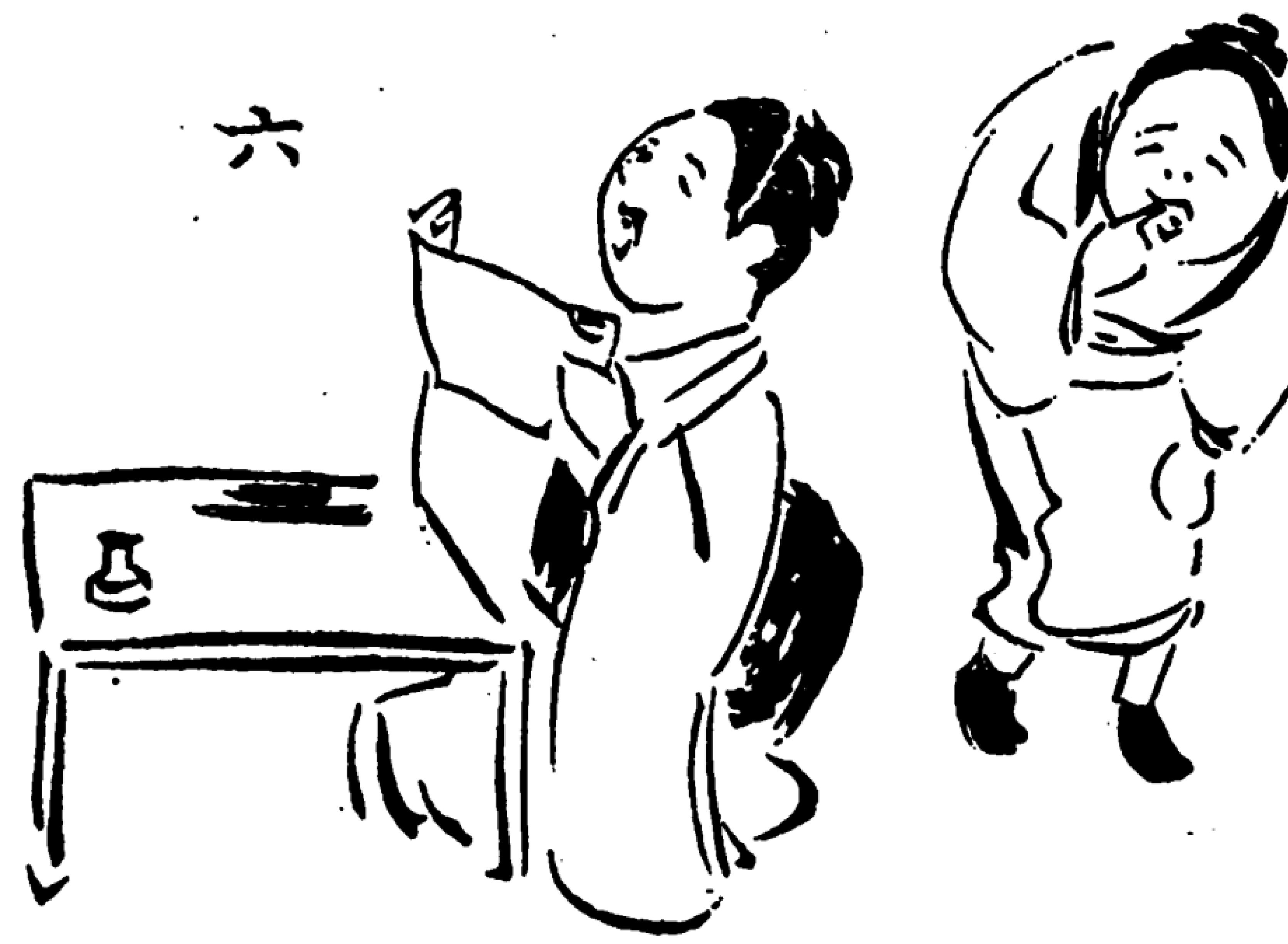


（前々號ニツヾク）

五

たのでありまして所謂安政の大獄とは即ち此事であります近衞殿の御學問所は六疊四疊半二疊三疊の四間と茶室とより成つて居て寔に物靜でムいまして平日は白綸子の御

服に八藤の模樣ある淺黄の水干袴を着け紫紋縮緬の被布を召させ玉ひますが、御奥に在らせ玉ふ事は稀にして大方は此處にお在玉ふのであります歌道及び御手習ひの御師範に渡らせ玉ひますゆゑ堂上方及び地下の人々よりも詠草のは△



第六圖

△御添削を乞ふもの尠なからず色紙短冊はいつも御文机の上に堆かく積り居ります今宵も夜いたく更けたれども猶夜の御寢所に入り玉はず燈を掲げて多くの詠草を御覧じおはします御次の間には近習小性五六人侍り居ります所へ老女村岡忙はしげに御前に手をつけば公は振返り玉ひ

「忙たゞしげなる面色何事ぞ」

と問はせ玉ふに村岡些しく急込みある樣子にて

「容易ならぬ一義にムりますればお人拂ひの義願はしう存じまする」

近衞公「近習小性の者遠慮致せと遠ざけ玉ひさて脇息を離れて座を正し玉へば村岡は聲を潜めて

「先刻御前を退出申せし月照上人只今引返して西鄕吉之助を伴ひ共々忍びて參殿仕りましてムりまする」

近衞公「ナニ只今歸山せし月照が西鄕吉之助を伴ひて又も參りたりとな……ム、其仔細早く語れ」

村岡「此度上洛なしたる間部下總守が謀計にて勤王の志士一々引捕へんとするの取沙汰專ら聞えましたる所噂さに違はず月照西鄕鵜飼などを先づ搦め捕らんとする由洩れ聞き一先づ身を匿さん

とて御暇同に参殿申せしとの物語承りて驚き入りまして厶りまする」

と申上れば公も痛く打驚かせ玉ひ村岡と顔見合せて霎時御言葉もなかつたが良あつて

「両人を此へ呼べ」

との仰せにかしこまりて座を起ち月照西郷を伴ひ出まする日頃心を王室に存し艱難辛苦は物の數とも思はぬ人々なれども一期の御別れ今更悲しく御前のさま何とあへしめやかであります月照は法衣の袖掻き合せて御前にぬかづき

「佛に事ふる身を以て日頃肺肝を砕きして露聊か私の榮利を圖るにあらず只皇國の御行末を案じ候ふのみなるに斯く淺ましき身の上になり果てゝ厶りまする」

と申せば公も御兩眼を屢叩き玉ひ

「諸國の浪士は是非に及ばす御坊の身に過ちあらんとは思ひ設けざりしは扨も王法佛法の末と覺ゆ」

と歎息し給ふに西郷吉之助進み出で

「今は嘆いて返らぬ身の成行き斯くて都に能在らんは焔を踏み劍を渉るに異ならず一旦都を忍びいで幕府の嫌疑を避るに若かずと存じまする」



七

村岡「座して其儘に罹らんよりは如何なる岩の間にも世を忍びて時節を御待遊ばされよ」

近衛公「實に雲隠れし月も風吹拂へば又明かなり嵐に散る山櫻又咲く春もある習暫時忍びて時節を待たれよ只此上は月照の身を西郷吉之助其方に賴むぞよ」



とお情深き仰せを承りて西郷感激の色を顯はし

西郷「御案じ遊ばされそ小臣世に在らん限りは上人の先途見屆け申すべく一先づ伏見より浪花に下り船路より九州に渡り薩摩へ伴ひて庇蔭申す所存に厶ります」

近衛公「いかさま薩摩は正義の國ゆゑよも恙あるまい」

と仰せられて村岡に何やら命じ玉ふと軈て持出したる浴御衣を月照の前に置けば

近衛公「是は關所など越えん時法衣と着替へて姿を扮し又道すがら盗賊の難なしとは云ひ難し僧なればとて寸鐵を帶びざればいと危き事になん此の短刀は麿が差料之を遣すゆゑ懐中に收めて彌陀の利劍になぞらへよ」

といと小さき短刀をお手づから下し賜はれば月照感涙に咽びつゝ推戴き

「身に餘りたる御情け何時の世にかは忘れ申さん我身は豫て大君に捧げまつりし此身ゆゑ切らきざまるゝとも惜からねど只皇國の御行末が案じ

られまする」
と伏沈めば殿下お言葉はなくて唯打點頭かせ玉ふのみであります此時西郷は進出で
「いつまで斯して在するも御名殘は盡き申さず去らばお暇申さん」
と、殿下に懇ろに暇を申し上げ、村岡にも暇乞し互に名殘を惜みて能出ました。

文林

栽梅　東久世通禧

一木うゑふた木うゑにし梅の花
　はやしをなして人も訪ひけり

田上春雨　津輕承昭

しつのをか水せきいれてゆたねゆく
　たのもしつかに春雨そふる

古寺春雨　蜂須賀茂韶

花にさへ人めまれなる山寺の
　いとゝしつけき春の雨かな

落花浮水　本居豊穎

さそはれし風をわかれて水にまた
　浮ても見ゆる花こゝろかな

春雨晴　長谷信成

夕月夜かすみなからにさしそめて
　はれわたりたる春雨のそら

雲雀消雲　小出粲

またくれぬ月の光もみいてけり
　ひはりのかけはきえし雲井に

堤柳　大口鯛二

青柳はみなわか木あり川筋を
　かへて程あき堤なるらむ

春庭　滋野井實麗

しもとけの庭もいつしか春めきて
すみれの花そさきいてにける

堤柳　千葉胤明

わたらしき堤にさしゝ川柳
なかくみしかくのひたちにけり

蝶　三輪義方

雪とちるはなにましりてからすはの
いろあるてふのひるかへりゆく

堤柳　遠山英一

このめ煮て人まつおはもみゆる哉
つゝみの柳もゆる木かけに

同　加藤義清

漸しくうゑしやなきもみゆる哉
きつきかへたる川のつゝみに

春水　本居直臣

なか〳〵に波の花なき靜けさは
池のこゝろや春をしるらむ

堤柳　鈴木小舟

わたらせの堤の柳うらやせて
はるをむかへし色としもなし

桃　南郷柳子

若草をつみにこし野にみつるかな
すもゝからもゝ花のさかりを

春植物　中村禮子

なにとなくなつかしきかな麥畑に
ましりてさけるそら豆の花

春瀧　服部磯子

よしの山花のしらくもわけすきて
かみの宮瀧けふみつるかな

春望　下田春興

走りての向ひの野邊も　うちわたすかなたの山も

さくら花ちりかひ山に　百千鳥さへつりかはす
百鳥のさへつる野邊に　うなゐ子は菫つむらし
櫻花ちりかふやまに　少女子はわらひをゑらし
笑をる少女のまそて　菫つむうなゐのもすそ
春の風ふきなすさひそ　春かすみ立ちなかくしそ
走りての向ひの野邊　うち渡すかなたの山を
はらく\と降さけ見れは　わかすそゐりける

道のほどにて

ゆくりなく四谷を立ち　千早ふる神田を過き
すみ田の朝川わたり　龜井戸の梅見にゆけは
玉ほこの道のほとりに　里人のわれに告けつる
かめゐ戸の御苑の梅は　早からは今二日はかり
久ならは今七日はかり　早かれとわれにつけつる
道の程なかは來つるを　いかにかあさむ

伊勢國なる親しき友に送る

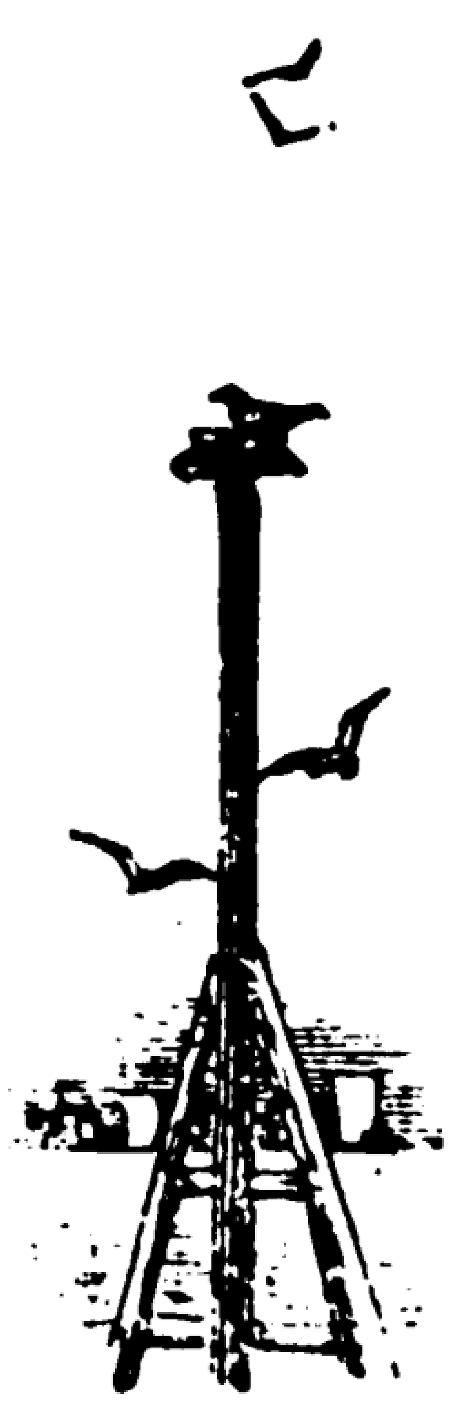
神風のいせのくにに　まなくそ舟はゆくちふ
時なくそ鷗はゐるちふ　其の鷗のときなきかこと
其の舟のまなきかこと　おもふそら安からなくに
歎く空やすからなくに　鷗なすつはさもかも
舟なすまかちもかも　まひのほりこき渡りつゝ
かたらはましを

菅公

さゝけけむみけしにさへそ知られける　うらおもてなききみかまことは

學校

とつ國の人もましりてをしへくさ　つみはやす代となりにけるかな





四月廿日兼題

月前花

天　和歌山市元寺町一丁目　長尾小榮子

おぼろよの月にゝほへるはなかけを
ひとりもとはるみやひをやたれ

評、風雅にして力あり。

地　東京府下荏原郡大井村二四八、邸内　三好珍子

高とののすたれまかせておぼろ夜の
つきとはなとのしなさためせん

評、詞づきはなやかにして、よく題意にかなへり。

人　東京四谷區右京町二十八番地　山本梓子

おもふどち花のうたけのさかつきに
かすみなからのつきそうかへる

評、いひしらず奥深し。

同　京都五條通寺町西入　坪内りき子

なにおへるさくらの宮のさくらはな
月に見る夜はあかすもあるかな

評、所がらことにおもしろし。

甲之部

和泉　福原菫子

てるつきの影はかすめとさやかなる
はなのにほひはかくれさりけり

越後　高澤れき子

月かけもおぼろにみえてはるのよの
かすみにゝほふはなのうすくも

茨城　荒野たに子

はるさめのはれにしよはの月かけに
はなのしつくもにほひぬるかな

大隅　山田稲子

さやけさを花にゆつりてよひ／＼に
かすむもゆかしはるのつきかけ

上總　高石登代子

ゆふ月夜おぼろにゝほふそてかきの
うすはなさくらいろのよろしも

東京　片山わや子

すみ田川きしの小なみにほふまて

おほろけならすはななみるかな

しつけさにあはれもそひぬ春のよの　三河　河合ねひ子
つきにそはなはみるへかりける

しら雲のつもるけしきとみゆれとも　三河　服部正子
はたさむからぬつきのよさくら

あり明のつきにおきいてみつるかな　三河　服部萬子
あはれよふかきはなのけしきを

かすみつゝこすゑに匂ふはなのよの　東京　近江利子
つきにはねあるやまさくらかな

いさたれもおきあかし見む春の夜の　東京　安井鏡子
つきとはなとのあけほのゝそら

つとめ来し花の木かけはひとたねて　東京　安井あや子
おほろにやとるはるのよのつき

はれくもる月にまかせてまとの戸に　栃木　青木たま子
きねてはうつるはなのかけかな

春のよはつきのひかりもへたつらん　大阪　大塚小黒子
たかねにゝほふはなのしらくも

うすかすみ花のいろかもひとしほの　青森　内本みち子
のとけさそふるはるのよのつき

ふけゆけは花もおほろにかすむなり　大阪　長野悦子
よしのゝやまのはるのよのつき

はるのよのつきのひかりによしの川　廣島　小谷治子
おほろにゝほふはなのいろかな

やまのはの雲にまかひてさきにほふ　丹波　大槻まつの子
はなにかすめるはるのよのつき

山のはにたなひくゝものやへひとへ　肥後　徳永萬瑳子
はなもかすめるはるのよのつき

さく花の木の間なもれてのとかにも　大阪　伊勢村春子
かすみてにほふはるの夜のつき

なきにほふはなの木のまに影さして　大阪　伊勢村はな子
おほろにかすむはるの夜のつき

雲と見るはなのさかりの木の間より　大阪　大坂谷のぶ子
さしくるつきもおほろなりけり

月かけとゝもにうつりてすみたかは　東京　中島かね子
なみのそこにもはなそにほへる

眞盛りのはなにひかりなゆつりつゝ　大阪　中館やう子
おほろにゝほふつきのかけかな

山さくら木の間もれくるつきかけの　肥後　野口靜子
さしものとけきはなこそみれ

天津そらおほろにかすむつきの夜は　肥後　服部台子
はなもひとしほなつかしきかな

おほろ夜の月にそれとはわかれとも　肥後　田代艷子
たかねのくもやさくらなるらむ

みるめさへ打かすみけりはるの夜の　肥後　田代綾子
つきさしのほるはなのあたりは

夕月のかけおほろなるにはのおもに　伊豫　竹村竹里子
さきほこりたるやへさくらかな

夕づきのかけおちかゝるのきはより　肥後　佐々小雪子
わか文つくゑにはなの香そする

すみ田川つゝみつたひのはなさかり　肥後　佐々有鄰子
つきの夜さくらうかれてそみる

時ならぬ木すゑのゆきと見るまでに　東京　林　常子
おほろつき夜にさくさくらかな

うすかすみたな引わたる山のはの　埼玉　槇田秋子

はなしつかなるはるのよのつき

よひ〳〵の月のかつらの匂ひあひて
はなのくもりもかすまさりけり　埼玉　横田音羽子

吉野やまはなのさかりをうれしくも
やよひのつきにあかす見ゐかな　長野　臼井ひさへ子

このゆふへ庭にうたけをひらきけり
おほろつきよのはなを見んとて　大隅　山田米子

むき出て見るひともなしはなの香も
あはれもふかきはるの夜のつき　岐阜　佐藤そう子

春かすみはれてさやけきつきかけに
にほひあらそふやまさくらはな　肥後　筑紫春子

ひるにまかふ春のみそらの月かけに
はなのこすゑににほひかはせり　相模　岩橋花子

いつしかと月はいてにけり庭のおも
さかりのはなにゝほひかはして　秋田　中川ふさ子

此まゝにあくるもしらてすきぬらん
つきにゝほへるはなみせし夜は　和歌山　瀬戸榮子

ほそとのに影さす見れはひさかたの
つきのうつせるはなにそありける　東京　松村あさ子

ゆけとゆけとかきりなきまて面白し
おほろつき夜のはなのしたみち　埼玉　前野ふさ子

さくら花さきそふにはのこのまより
にほふもゆかしゆふつきのかけ　筑後　鏡山増代子

おほろ夜の月のにほひもたゝならぬ
こすゑにかゝるはなのしらくも　伊勢　河原芳子

長き日を日くらしみれとなつかしみ
つきにうかるゝはなのしたかけ　伊豫　小田操子

春の夜のつきかけなからなりてまし
はなやかつらのにほひわくへく　東京　矢野保子

月もはなもしつかに更るはるの夜の
つゆにゝほひのまさりゆくかな　東京　舘脇ます子

ふけわたる月のひかりもつゆそひて
よる見るはなそのとけかりける　東京　戸塚てつ子

さき[illegible]ゝく花の八重かきさしわけて
もれ出るつきのかけおほろなり　東京　吾妻ちか子

ひるのまのちりおさまりて花のやま
つきにゝほふもしつけかりけり　東京　内田とく子

春のよのつきにかすみてきこゆなり
はなのかけふむみやひをのこゑ　安房　鈴木秀子

なか〳〵にひるよりも猶あはれそふ
はなはつき夜に見るへかりけり　三河　石川久子

おほろ夜の月とはいへとしかすかに
はなにはかけのきよくもある哉　三河　石川類子

さきなみて色も香も深きまさかりの
はなにおほろのつきそゆかしき　肥後　關かれ子

おほろ夜の月をたよりにたつね見む
くものうへ野のやまさくらはな　信濃　岩間稲子

ふゆの夜のこゝちこそすれ花さくら
ゆきかとはかりてらすつきかけ　横濱　細谷まつ子

月かけもふけゆくまゝにかすみつゝ
みるもゆかしきはなのひともと　東京　山本ぬひ子

文まなふまとにさしいるつきかけに
にはのさくらのはるも見ゐけり　信濃　北村との子

いさみんと門をたちいてなかむれは　東京　山本静子

きのふ今日さかりにみゆしさくら花
はなにかすめるよはのつきかな　肥後　高田重子

おもしろやみ空にのぼるつきかけに
なほいろそへてにほふつきかけ　肥後　藤永市子

うらうらとかすめる空につきいてゝ
かすみてにほふやまさくらはな　日向　林くに子

なすまきてうちなかむれは月かけも
にはのさくらもゆきと見ゆけり　越後　高澤やす子

枝うつるつきはかすめとさくはなの
かすみてにほふはなのこすゑに　愛媛　黒川照子

なつかしく霞めるつきもにほふかな
にほひはつゆもかはらさりけり
さきつゝゑたるはなのこすゑに　愛媛　水木友子

四月二十日兼題

菫の花を友に送る文

天

東京日本橋區濱花町廿七番地　近澤愛子

先つ頃より御かたらひ申候今日の野遊び、君には御障事の出來給ひし由仰越され候へば、わらはも又の日諸共にと思居候ひしに、幼き者等のそゝのかすに誘はれて、志す方にまかりこし候處、やよひの空のうらゝかにかすみ渡り、こゝの垣ねかしこの軒端より、得ならぬ花の香いとゆかしく、青やかなる麥生の中より、聲ものどかにひばりの上るさま、里の子の小蝶を追ゆくなど、とりどりにわかぬうちにも、すみれの色こく芝生に匂へるさま一入なつかしく、實に春の野のゝどけさいはん方なく、おなじすさびの人々も集ひて、日頃うちしづめるこゝろも、はれやかに長き一日をすごし候。扨も君のふりはへものし給はぬこそ返す返すもいと口惜しくおぼえ候へ。せめては君の色も香もある言の葉だに賜りたく、はた野遊びの印までにつみとり候すみれ、一たば御目にかけ候まま、あはれ一日なりとも、文机の上にさし置れ候はゞ、わらはは元より、花もいかばかりかうれしき事ならむかとかくなん。かしこ。

評、野遊の實景を寫きて、その家づとにせる趣向おもしろく菫も一しほゆかしくおぼゆ。筆路流暢また凡ならず。

地

伊勢國度會郡宇治中之切町 河原芳子

御容子いかにと思ひつゞけながら、くさ〴〵の私事に取り紛れてまふのぼるべき折も侍らず。一日一日に色めき渡る花のけしきを見るにつけても、降り續く春雨の空心苦しう、晴やらぬ閨に引籠り居給ふ御胸の内、いかに詫しき御事ならん、と病多き妾の身にたくらべては、なほ一しほおいとしうおぼえ候。まして此頃のつれ〴〵には物の本にも屈んじ、花瓶の花にも飽き給ふらん、いさゝかにてもめづらかならんこそよけれ、とて、白き菫の花の一鉢を、せめてもなぐさみにおくり參らす。あはれをかしき花の樣や、と蝶の夢路のつかのまにても御心輕くみそなはし給はんには、いかばかりのぼいとこそおぼえ候へ。さるにてもみ心强うおぼし給ひて、いやが上にも御自愛專一にこそ。あなかしこや。

評、友のいたづきな慰めん爲の菫、その花の如くやさしき心根な巧に寫しいだしたる、まことに老練の筆といふべし。

人

長崎市西山七十一番戸 日高かず子

糸遊に心ひかれて鶯の花の宿をたづねありきて、春の野に日暮しつ。今なん家にかへりはべりぬ。この菫、草のはつかの花ながら、摘みに來ませといふ野邊の便をつたへんとてなんまゐらす。根ながなるは、紫のゆかりなつしき宿に久しく匂へとこそ、あなかしこ。

評、簡潔にして余情あり。

（以下原稿到着順）

東京 山本梓子

過にしころの、御あつしさの名殘に、都の花の盛もよそにたれこめさせ給ふよし、いかにいぶせくやおはすらむ。ひと日、なかしき御物語をも聞えて、御心はるゝよすがにもなりなましとまうで侍らまほしきを、きのふけふ、去りがたき事のみ、さしつどひてなむ、心ならずも、友のみちにそむきたる罪、せちに免し給ひてよ。このすみれはしも、今朝、幼き妹の、ねぐらの鳥よりもいととく起出でたるを、あやしと問へば、友どちと野邊の遊のちぎりありとて、胡蝶と共にあくがれ行き侍りしが、今しもかへりきてつとにと得させ侍りしにこそ。ゆかりの色の又なくなつかしきに、君も眺めさせ給はゞ、つれ〴〵の御目うつしにもやなりな

むと、れこちたるを、さながら植ゑてまゐらするになむ。御枕邊にもおかせ給はらば、いとも、うれしや「行やらぬ人もしのべと、むさし野のゆかりをうつすつぼすみれかな」はかなき花も御心なぐさみに、ひと日も早うおこたらせ給へ。近きほどには必ずとぶらひまゐらせむ。よろづは、そのをりふしにと申しのこし候。あなかしこ。

長崎　内藤みよ子

去年の春、共に袖振はへて、霞たつ野邊に日もす遊びくらし、家土産にとて根こぢて持ち來しつぼ菫、昨日今日笑み初めぬ。さしたる匂は侍らねど、さすがに去年の忍ばれて、樫の實のひとり見すごさんも本意なければ、色こき一本を破鉢とう出て移し植ゑ、使につけて送り侍るになん。日頃めでよませたまふ文にゆかりの色あせんまでも、文机のもとに止めたまはゞ、こよなきさちにこそ。かしこ。

上總　高石登代子

あさみどりなる空の景色、いといみじうかすみわたるに、庭のさくらも、今を盛とさきにほふなど、いとよきをりからとはなりぬ。さて、妹こと、先つ頃より、學校しけんやすみにてかへりをり候が、今日はいとうらゝかなる日より故、いざ野あそびせんと、いひいで候にそゝのかされて、うちつれ立ちぬ。見渡せば、野は一面に小草のみどりうるはしきが中に、色もゆかしき紫のすみれの花の、いとあいらしうさきそろひたる風情の、ゑにも、文にもつくしがたく、思はず、日の西にいるをもしらで、あそびくらし候ほどに、ふと思ひ出たるは、君の日頃すみれを、ふかくめでさせられ候御事なりけり。あはれ、此のさかりなるに、諸共にと思ふもいと口をしう、今さらくい候もせん方なければ、せめては、一株をだにと、紫のことにいろこきをゐらみて、只今持かへり、をかしうは候へども、鉢植にいたし、御目にかけ候まゝ、いさゝか文机の友となしたまひなば、心なき花も、いかに、うれしくや思ふらんとてなむ。かしこ。

大阪　桝田登子

野をなつかしみ一夜をといへりけんも、げにうべなりけり。紫のゆかりの色の、薄く濃く咲匂ひたる。いひ知らずあはれ深くなん覺しかりし木々の梢も、夜はの嵐の末に亂れて、はかなく雪と散かひ、こがねなす菜の花も、やう〱うつろひ行を、ひときはうつくしう、朝露を玉とかざして、目もあやにゑみほころべる春野の菫、蝴蝶の外は塵をもすゑじの花の色香にもまさりて侍るを、あはれと見はやさん人もなくして、いたづらに小田に土かふ男の子、將た畔に麥笛ふける里の童のふみしだかんもあたらしく、賤が手すさびに、根こじて生ふし立つる是の一鉢、菅の根のつれ〲の慰め草ともなりなましかばと參らするを、文机の邊りにさしすゑさせ給ひて、昔の紫の露の情も、かけそへ給らんには、如何斗りか嬉しうこそ。はた、花のめいぼく此上なかるべし。いつか雲井の空の、長閑きみ心のひま、ゐ給ひ和子君たち、ゐておはし給ひてんや。爰にもはらからあまた侍れば、秋つられて野べにまじり、そがひの山ぶみをもなさまほしう、おなじくは盛りすぐさせ給はでと、そゝのかしまつるになん。垣つの糸柳の、いと〱なつかしく、待ちきこゆ侍るぞかし、いかで〱。

色も香も見はやすふしはあらしとも
　あはれかけてよこれの菫に

東京　林　環子

今日しも文机にむかひて、紫の色香ゆかしき筆の跡、たづね侍るをりから、玉簾のゆらぐまに〱、ゐならぬかをりのつたひくれば、あやしうおもひて、庭におりたち、香をとむるに、はや夜べ

の春雨に、桃の花大方は散りうせて、たゞ八重櫻に春の名殘をとどむるが中に、兼て御許様と花咲く頃にはと約し参らせし、亞米利加種の菫の花、三つ四つ二つ我は顔にほゝゑみそめたるにてありけり。さても心なき草花さへ、紫の色香ゆかしとしたひけむととりあへず下僕に命じ、堀り起し鉢にうつして、あはれおほめごとの一つだにあづからばやとかくなむ。かしこ。

むらさきの色香ゆかしき菫くさ
きみの友とそなるもうれしき

肥後　徳永廣子

人々のさむさをしのぐ盲の葉も、いつのまにかちりはてゝ、あたたかくふきくる春風に、うるはしく、のどかにかほる梅は、はやなかばすぎつるに、櫻の花も一もと二本さきそめければ、菫の花もいかにとおもひ出されて、もえいづる野べの若草ふみわけて、遠近とつみとる花も籠にみちて、岡のたもとからばやと、おもふばかりになり侍りぬ。その菫を庭に植ゑしめ、朝は朝な夕なめでつるにいとたのしく侍れば、中垣ゆはぬ君の御もとに、すこしばかりをおくり奉り侍りぬ。ながめさせたまひてよ。あなかしこ。

東京　三好珍子

昨日は日曜日なるに、いみじき天氣にて侍りし程、妹などのそゝのかすまゝ、野邊遊びにとものし侍りき。さても、紫のしとねしきつめたらんやう咲そろひたる菫の、いかにも、みすてがたう侍りしまゝ

雨風にみするもをしきはなすみれ
君にとてこそつみはやしけれ

萎れぬうちにとかくはしのゝめ早う、門鎖かし侍るを、惡くなとかめ給はで、御机近うさし置かせられ、せめては、み心ゆかせ給はん折りに、み歌の料ともなさせ給はゞ、妾が心ざしの程もあだならず、花も元の野邊にひきかへて、幸いかばかりに侍らむかし。かしこ。

丹波　大槻まつの子

市中の所せき、住居に困するのみならで、ひばり、きゞす、などの聲も久しうきゝ侍らずと、御文のはに見受けまゐらす、去年の春は、同じ野に誘つられて遊びしを、君は今都の人となり給ひぬ。はや一年は、ゆめのまにめぐりきて、此頃は四方の八重草花の盛りときゝつるに、こひしき心地せられ、今日は日なみも暖かに、野山のけしき長閑にかすみ立ち侍れば、弟妹つれだち野遊びにもやと侍りしに、聞きしはたがはず、錦をのべしごとく、こゝに、菫の花のいと美々しくこゝかしこと、時しりがほに、咲き匂ふうれしさ、皆々よろこびつみ侍りしが、をしき名ごりをのこしつゝ、又の日を約し、やう〳〵日の暮るゝころ、いそぎ我家へ立ちかへり、とく取り出で見るれば、優にやさしき姿も、又一しほに侍れば、あまりのなつかしさに、思ひ出され、御送り申候、幸なるたよりにまかせ、しぼまぬ内と、もたせ上まゐらすになん御ながめ下し給はらば、いかばかり、うれしう存じ侍るにこそ。あなかしこ。

東京　太田やへ子

春雨の空なごりなく晴れわたりて、見わたしの木々も青み渡れるに、野邊のありさまはましてとゆかしく思ふ折から、妹の進めに任せ、いざや雪消ぬ野べの若菜つみてんといでゆくに、思ひもしろく、若やかに色づき、こゝかしこもえ出だせし若草は、昨日の雨にいま一しほの色まさりて、霞のおくにさへづる雲雀の聲もうらゝかに、あたゝかにも非ず寒くもあらぬ風のふき渡るも心地よしや。うら〳〵と長閑なる野邊の小徑そこはかとなく歩み行くまに〳〵、吹き來る風のねならぬ香のすれば、何ならんとかたへ

の圖を見あぐるに、菫の花のさきそめたるなりけり。いみじうめづらかに思へらるれば、さそく手折りてまゐらするになん。なほ近きうちにさぶらひて、聞きこえ上ぐべくこそ。かしこ。

東京 林 常子

今日の野遊、いかばかりたのしからましと、指折り數へて、まちまち侍りしかひもなく、今朝御使にて、御許様には俄の御さしさはりと承り、いとほいなくおもふ折から、他の友垣のおとなひきて、のどかなるけふの日かげをいかであだに過さるべきなど、そゝのかすまゝに、いなまん心もとなければ、打つれて野遊に物し侍りしに、春のめぐみいたらぬくまなく、ところせきまで、若草の青々と萌えそむる中に、菫、蒲公英などのいと美しう咲き亂れ、らうたげにうたふも千鳥の聲は、妙なる音樂のしらべをかなづるかとあやしまれ、身は仙境に遊ぶ思ひし侍れば、日ねもすあさりくらし侍り。げにもけふの野遊、御許様と携はらざりしことのかへすがへすもおしまるゝに、籠の中より、つみこし菫のいとあはれさな、鉢にうつして御目にかけ侍る。あはれ、文机の片隅にもおかせ給ひ、朝な夕な、御めぐみの露うるほし給はゞ、此花の面目などかこれにこすべきと、かくなん。あなかしこ。

肥後 松々有斯子

米國にて、來年行ふべき故女監の紀念日には、菫を以て特別の飾となすことに定め、其日をば菫花節とよび、將來此日を守ることとせりと承り侍りぬ。彌生の中空のどけきにうかれ出て、目につくつくし、蒲公英など、かたま籠げにつみいれし妹は、ほこりかに、

彌生の空のゝどけきに。心もはるになりにけり。

雲雀の床のつくつくし。たんぽゝつみて面白や。

とうたふもをかしきや。姿もともにうかれ心につみためし菫の花一束、御學窓におくりまゐらせ侍りぬ。野べのあそびの紀念にと見そなはしたまはらば、是にすぎたるよろこびはあらじと、かくなむ。あなかしこ。

東京 山本靜子

ふりつゞきし春雨も、夜のまにはれて日影うらゝかに、庭の若葉の青々と、萌え出で初めしひまより、すみれのはなのいとうるはしく咲出で侍りしを、いかでこゝにてのみながめくらさんは、いと〳〵をしきかぎりになん、さぞや御庭の内にも、多く侍りぬらんと存じながらも、あまりうつくしきまゝに、この一本根ざし、願はくは御庭前のすみへなりとも、うゑ給へかし。花も又鳥の籠を出でし心地せらるゝならんと、かく御らんに入れ候。野にも山にもちかき住居なれば、こん日曜日を幸ひ、つみくさなど御供致し度候まゝ、ぜひぜひ御妹の君伴れ御出給ひてよ。こゝもといづれも、うれしく待上侍るにこそ。かしこ。

和泉 稲原菫子

長閑なる春の日影は、早や殘り少なく、惜しと思ひし櫻の花も、しづ心なく、散りみだれゆく此頃、君にはいかゞ渡らせ玉ふや。いとゞながき日を、暮しかね玉ひぬらん。きのふ今日より、わが庭のまがきのもとに、つぼすみれ、一人春の形見と、ゆかりの色に咲きいでたる優美さ、かをりさへ、いと床しくなつかしければ、中々に、一人ながめんも、心なきわざに侍れば、一本二本うつし鉢植にして、御文机のほとりにと送りまゐらすれば、御つれ〳〵のをりあはれとめでいつくませ玉はらば、こよなき幸になん、かしこ。

東京 篠田園子

柳のみどり花の紅、こゝもかしこも、さながら錦をしきつられたらむやうになり侍りぬる折柄、つとにみやびの道にすぐれさせ給

へる君には、日毎夜毎折にふれての御秀詠もさぞかしと推しあげまつるになむ。かばかりのどけき頃となり侍れば、片田舎にわび住居する姿も、さすがにいぶせき庵にのみは引きこもり居られずさりとて上野向島のごと美しき花はあられど、日々雲にあがる雲雀の聲にあくがれ出でゝは浦の廣野にわらび折り、さては、つくしつみなどして、眥の根のながき春日をあくかも知らず暮し侍れば、余所事ながら御心易うおぼし給ひれかし。今日も妹と、あさまだきより雲雀のねぐらを驚かし、これなる菫をつみ侍り。皆ながら草深き庵に匂はせおくも、花のためいと本意なきわざかなとて、丁度よき序ありしなもて、わざとならねど一束ね、ねごちのまゝにて參らせしになむ。世の諺に菜はさめやすきとか申侍れどはらからも啻ならぬほど親しき君と姿にして、いかでさやうの事の侍るべき。このいろのゆかりの御言の葉もあらば、こよなううれしき事になむ。あなかしこ。

播磨　本多宜子

ひまゆく駒の足早く、いつしかと待ちわびし春も、早や中ばと相成候折から、いともなつかしき君には、如何渡らせられ候や、さいつ頃、ともに梅見に參り候折り、君には此程より、花の道に入らせられ給ふと承り、何か好き花にてもあらば、參らするなんと日々心付け居り候へ共、好き花とてもなく、むなしく日を送り候ひしが、ふと見れば、賤が伏屋のかたほとり、僅に咲き初めし菫の花、いとをひたち惡しく候へ共、かゝる草の屋にありて、かりそめにも珍づる人なく、あたら、此の惜しき春を過させんも、いと口惜く侍れば、手折して參らするになん。何とぞ、花の姿、御繕ひ給ひて、御稽古のはしにても御加へ給はゞ、花の面目此の上もなき事と存候。尚又、庭の桃の花、今を盛りと咲きみだれ居り候まゝ、春の日長の物語り、樂しきふしも候はんかし。いで御學びの御いとまに、何とぞ、御車さしよせ給はゞ、いとゞうれしき事に侍るになん。あなかしこ。

雜報

内報

●●●御救恤　天皇・皇后兩陛下には、去月卅日福井市幷に附近大火に付憫然に思召され、罹災者へ御救恤として金三千五百圓御下賜あらせられたりと承りぬ。

●●●●●●●廸宮殿下と御避寒所　廸宮殿下には、至つて御健勝に渉らせられ、餘程御成人相成り、此頃は御附の人を御相手にエンコを遊ばし、御玩具物な

どを御好みにて、輿じ玉ふさまいかにも愛らしく拜し奉れりと。且つ目下御齒の成育時代のことなればとて、特に御食物は侍醫の注意により、牛乳とオモユを召しあがり居らるゝ趣にて、昨冬は大磯鍋島侯爵別邸に御滯在あらせられしが今回小磯梅澤地方に御避寒所を御建築。來冬期迄に竣工せしむべき由御内定相成りしと。同地は來十五日新に開業せらるべき二宮停車塲附近に當ることゝて、當地方人民は大に歡び居れりと。

●●●●●●

●常宮給謌御師範　常宮、周宮兩内親王殿下には、女流の謌家野口小蘋(親)氏を召させらるゝ事となり去る十一日奏任待遇にて、常宮御用掛を仰付られたりとぞ。女史の名譽此上なかるべし。

●●●●●●

●小出翁の光榮　小出粲翁は、本年古稀の壽に達し、家集「くちなしの花」後篇發刊の祝を兼ね、過日賀筵を開きしが、同書は此程柳原典侍を經て

天皇陛下に、小池掌侍を經て　皇后陛下に、又柳原典侍より　東宮　同妃兩殿下へ傳献に及ばれしが　兩陛下幷に　兩殿下にも、親しく御覽を玉はりし由洩れ承る。

●●●●

●建碑除幕式　下田女史等の首唱にかゝる、河内四條畷楠正行朝臣の墓側に新設せられたる、その母儀建碑除幕式は、去る三日擧行せられたり。當日は幸ひ四條畷神社にても、午前八時より大祭を行ひ、本殿祭の後、神輿に神靈を移し、それより、南山及び湊川の遙拜式ありて、墓地へ臨幸す。行列の旗、眞榊は式の如かりしも引立烏帽子に白の葛布の直垂を着け、重藤の弓、鷲の羽の征矢二筋を持ちたる雄々しき武者百四十三人供奉したる、そのかみの偲ばれていとあはれなり是かの朝臣が師直と最後の血戰なしたるみぎり、肱肱の朗黨として率ゐたるに擬へるものにて、大祭の時の恒

例なりとぞ。かくて神幸道の傍、鳥居のあたりに神輿をとゞめ、こゝにて田疇祭を行へり。當時戰酣なる時こゝにて午餉を傳へたる紀念によりて也。夫より再び列を正し墓前に着し、午後二時頃より除幕式を執行せられぬ。參列者の重なるは、細川男、菊地侃三、青木文造等男女三十余名。斯て大阪府師範學校女生徒、北河内郡小學校女生徒等は何れも職員に率ゐられて、一定の場所に整列し、まづ進饌の事をはりて、日野宮司は祝詞を奏し、發起人下田女史、細川男所感を述べて將來の母たらむものを警め、西村氏一篇の祝文を朗讀して式を了る。つゞいて畷ホテルにて晩餐會を開かれ、菊地夫人の挨拶あり余興として遙に岡山より來りて吉備樂を奏せしが、舞手は皆妙齢の女子にて、其菊水曲（楠公訣別）の如きは、シテワキとも能く其伎は熟し、時も時とて滿場に暗涙を催さしめ、後談話を交へて宴を撤したるは午後七時過ぎなりしといふ。

●大阪の婦人矯風會　去る二日より大阪江戸堀大阪敎會堂に於て紀念會を執行したるが、東京よりは矢島楫子、潮田千勢子等出席し上毛、横濱、京都、神戸、名古屋、若松等の各支部地方よりも臨席者あり、菅公千年祭に際し、京都市に企てられたる踊りを止めしめんとする京都支部の運動に應援者を送ることを議決し、引續き矢島會頭の勸話、敎役者、敎育者、新聞記者、實業家、在留外國人の矯風會總代等交々勸話をなしたりと。

●女學生のベースボール　女子大學にては豫てより體育に意を注ぎ、同校並に附屬高等女學校に於ける體操は、何れも學生の性質と身體の强弱に其々適應せしめ、且つ興味あるものを撰びて之れを實行し居れるが、同校體操敎師白井規矩郎氏は

種々考案の末、今回ベースボールに改良を加へて、其の位置を五角とし、相互の距離を短かくし、之れを大學生徒に試みつゝあるが、成蹟頗るよろしき由にて、來月同校設立紀念會の節には、餘興旁旁此改良ベースボールを行ふ筈なりとか。

●子爵夫人と二葉幼稚園　麹町區番町の二葉幼稚園は、貧民の子弟を集め、慈善教育を主とする處なるが、子爵加納久宜氏の夫人は去月十二日亡北堂百ヶ日の忌日に相當するを以て、追善の心を兼ね、同園幼兒に一日の快遊を與へんとて、去る十日午前八時より、此可憐なる幼稚生五十餘名を大森の自邸に招き、邸内に於て種々の遊戲を催さしめ、晝餐後は大森の海岸に汐干狩を催したれば、無邪氣なる幼兒は、生れて始めての事なれば、喜色滿面に溢れ、獲物を携へ、監督者に連れられ滊車にて歸京したりと。身のほど高からむには、人を人とも思ひたらぬもの多かるが中に、夫人のごときは實に緣がうちの紅ともいふべし。

●人力車の害　寺田高等商業學校長曰く、東京には凡そ九萬輛の人力車四萬人の車夫があつて、之が爲め費消する高は、一年殆んど千萬圓に近いと云ふ驚くべき金額である。而して車夫の身体上より云ふも、肺を破り心臓を破り、大に健康を害ふは確かなる事實である。近來人力車夫が益益増加して苦しいながらも生活を爲して行く譯は、乘り人も以前より殖えたからであるが、さて乘客はと云へば、その身分服裝等より見るも徒步するが相當なるべきものが、妄りに車に賴る樣になつたりして惡慣惡化である。車に乘る金で牛肉か鳥でも食したならば身体の營養を助くることが出來て丈夫となるに却て人力車に乘て脚が健康を害することをして居る。地方へ行つて見ても、縣

知事や書記官や市長などが、役所と自宅とは目と鼻の間にありながら、車に乗つて往復する。又は自分が徒歩して、後より空車を曳かせて行く。是は實に無駄なことで、何も必要もないに体裁のみを飾るには及ばないことである。東京も地方も益益此の如き有様になつては、生活に逐はれた上句の果ては人力車夫とならうと云ふ悪しき事例を作る。如何しても今の内に防ぎ止めて此賤業を減じ、一方には乗る人曳く人の健康保全を計らねばならぬ。所謂活潑ある精神は健康なる体軀に宿るであるから、我國民は一層体力を養成せねばならぬ。節車會は脚力体勢を丈夫にする一の方法で、極めて必要だ。故に諸君も進んで實行し、亦奬勵して貰ひたいものぢや。

●花と人　世の中は三日見ぬ間の櫻かなげに上野山王臺のあたり、櫻雲爛熳として、吉野の山にも比べつべく、佐保姫が八重の霞をたすきにかけし手際に、いひしらず美はしき色を染めいだしけむも、夕の嵐つよくして、あはれ落花狼籍として散りみだれ、風流男の影も少なうなりぬ。さぞや花神も口惜しうおぼすらむかし。さてことしは去年より一週間ばかりはや咲きにて、こぞの神武天皇祭には、七分の開花ありしが、ことしは既に散らむずる有様なりき。されど開花中天候の異常、寒暖不定なりしかば、花の命も五日位長かりしと。またその風俗を見るに、去年までは、多少見榮えある趣向を凝らしたるもありしに、ことしは會社商店等の廣告のためにせしもの多くして、別におもしろしと見ゆもの少く、總て人々の着飾りたる花見小袖も、さまで眼を惹きたるはなかりしとぞ。

外報

●伊國王の美德　伊國王エマニユエル三世は、

慈善の心に富み、殊の外民を愛くしまるゝ由なるが、此程、王の許に達したる多くの請願書中、王女ヨーランドの保姆たりし一婦人より、年金の下附を要求するものありき。侍臣は之を閲して、如何に處分すべきかを王に問ひ王は王女に問へと答へらる、王女は尚搖床の中に居らるゝ嬰兒なりしかば、侍臣は恐る〳〵其請願書を搖床の中に差出したるに、王の嬰兒は、手をも觸れられざるより、侍臣は此事を王に復奏せり王は之を聞かれ、「沈默は承諾を意味す、王女は承諾したるなり、保姆に年金を與へよ」と仰せられたりと。

●土耳古の離縁法　土耳古に於て、最も無造作なるは離縁なり、離婚裁判所の設けもなければ、無論裁判官と云ふものもなし、妻を離婚せんと欲する男は、我は汝を離縁すべしと、三度繰返して宣言すれば、それにて事足りぬべしと。されど夫は以後離縁したる妻に向つて、若干宛の扶持料を支給すと云ふ。いま〳〵しき風俗なりかし。

●一日に六組の結婚　獨逸ルベック市に於て、近頃一日の中に六組の結婚式を擧げたる一家あり。縁組の一方は、某ホテル主人公の四男と二女にして、彼等は一日の中に何れも縁談整ひて、即日同樣の式を擧げ、翌朝には此幸福なる新郎新婦打揃ふて食卓を圍み、婚儀の朝食を取りたりと。さても目出度ことゝ云ふべし。

●蓄音機にて結婚　結婚に蓄音機を利用したるは、近頃米國に起りしこと也。某地に夫婦の約束を整へたる若き紳士と淑女とありたるが、その時疱瘡新婦の家に發生したるより、正式の婚姻式を擧ぐること難かりければ、新婦は誓の言ばを消毒されたる蓄音機に話し込み、新夫に送り屆けしに、之によりて登記を濟ませ、兎に角結婚式を終りたりとぞ。

●落葉籠　紙面の都合により休載

口繪に就きて

●・・・・岩倉公爵夫人　夫人名は久子と申し文久三年十月澤家に生る。正三位爲量卿の女にして澤伯爵の伯母君に當らせらる。幼き頃より整肅なる家庭におはし立てられ、修身齊家の道はさらなり、和歌音樂其他百科の學藝に通じ給ひ、令名また高かりき、長ずるに及んで岩倉具定公に嫁がれ、琴瑟相適ひこゝに五男四女を擧げさせ給ひぬ。大姫君は、即ち　小松宮若宮依仁親王殿下の妃にして、仁慈深く下を惠ませ給ひ、德操高くおはします。以て夫人が、いかに子女敎育に留意せらるゝかの一斑を窺ふに足らむ。

嘗て愛國婦人會の創設に際し、衆僉その會長たらむことを請ふ。夫人の謙讓なる、他に適當の人あるべしとて固く辭せられけるが再三强ひられ、遂に會長の任に付き、能く部下を統轄して、我邦婦女の爲め大に貢献しつゝありといふ。

●・・・・・・柴田刀自　刀自謙遜辭讓其經歷を語られざるを以て之を知るに難かりしが今家人等より聞き得たる大略を記すべし自刀は京都の碩儒柴田翁の女にして明治九年八月の生也天資穎敏學を好み姉君の傍らにて常に溫習に耳を傾け或は父の門弟子に敎ふるを窃に聽聞する程ありき母君は平素子女敎育に深く意を用ゐしかば之をいとしきとに思ひ試に女大學を敎けるしが一度聞けば悉く之を記憶し且此頃より和歌をさへ詠じて衆を驚かす事又多かり十八年銅駝小學校初等科を卒業し超えて同校四年級に編入せらる素養ありしを以て也學課の程度の高きに係らず爾來常に優等を以て首部を占め府知事より賞品を贈らるゝ事數回廿年高等女學校技藝科に入るもと父君は勤王愛國の士其家庭の嚴正なる男女居を別にし尙女子の餘り深く學問するを好まれざれば偖はそこに入れつる也刀自性來御國振を好み家に歸りて門人安藤氏に史書を學び既に造詣深きも父君の敎誡を守りて少しも容に

顯す事なし。廿一年　皇后陛下の行啓あらせらるゝや撰ばれて茶の湯を御覽に供へけるにいたく感賞して御下賜金あらせられしが皆學校に寄附せられぬ廿三年父君の許しを得て同志社女學校豫科三年に入り研讃苦學せし中に學課の變更により三年級を以て卒業し尚温習科に止りて勉學せり教師ウヲタース孃刀自の才學を愛し之を伴ふて名所古跡を探り肺病を煩ひて歸國せんとするに際し外遊を慫慂せられしが故ありて果さず其他外人より留學を勸められし事屢なりき。かくて廿七年九月温習科を卒業せんとする六月遽に其父君を失ひしかば刀自哀傷の餘病をおこすに至りぬ。父君元來慈仁の志に富み初め柴田中學を起し、また資を投じて東京に遊學せしめし者十數人なりしとか其後刀自は母君及後見人と共に徐に家事を處理し廿八年三月東京に上り故小中村博士等の諸大家につきて國學を專攻す、傍ら慈善事業に力を盡し廿九年獨力女子英和講習會を設けて母と倶に子女を教育し其門下より出でたる淑女才媛多しとぞ

●仙臺躑躅岡の櫻花　宮城縣仙臺市の東端に躑躅ヶ岡と稱する所あり舊藩の調馬塲なるが同藩の第四代綱村公（演劇仙代萩の鶴喜代君なり）の時垂絲八重咲の名種數百本を京都より取寄せて馬塲の兩側へ植立られたるもの貳百餘年の歲月を經て何れも三抱四抱の大木となり梢は峥嵘として空に入るかと怪しまれ枝は嫋々と垂れて地に曳く計りあるに四山の雪消えて春風徐ろに吹き來れば淡紅の花を隙間もなく着けたるさま天地皆紅色になりさながら花の洞に入れるが如く、美麗なること舌にも筆にも其萬一を言顯す能はず。其樹の古き事其數の多きこと其花の艶なること此の三の點に於ては上野も向島も能く及ぶ所にあらず維新以後此處へ第二師團の兵營を設けられしかば幾分か其美景を殺がれし感あれど紅雲の棚引ける間より巍然たる碧瓦白壁を望むも亦一の美觀なり
櫻樹の間に釋迦堂ありて赤栴檀の釋迦如來の像を

安置す抑此尊像は仙臺藩第三世の室三澤初子（濵劇の政岡なり）の守本尊なりしを綱村公其母罔極の恩に報いんとて此處へ新に堂宇を營み安置せしものなるよし公自身撰文の碑石建てり又堂前に白木蓮あり希代の名木にて其古は枝幹の總丈十五間に亘り花の盛りには白龍の天に昇るが如くにて日本第一と稱せられしものとか今は大半枯れ朽ちたれども猶巨大の枝幹を存し世に珍らしき純白大瓣の花を開き昔日の壯觀を想像せしむ。躑躅岡を距る數町の處に孝勝寺と云ふ法華宗の寺あり此寺には前記の三澤初子幷に二代忠宗公の內室池田氏振姬（池田輝政の女にして二代將軍秀忠の養女）の墓あり。今年は東北地方殊の外寒氣激しかりし由なれば昨今こそ櫻花の眞盛りなるべし日鐵常磐の兩線路を利用して赴かれなば一泊にて見物に充分なり目馴れし都の花よりも亦一段の興味あるべし

新刊寄書

女藝	第二號	東京	新進社
兒童研究	第五卷第一、二號	仝	教育研究所
少年世界	第八卷第四、五號	仝	博文館
婦人と子供	第二卷第三、四號	仝	フレーベル會
刀劍會誌	第十七、八號	仝	刀劍會本部
偕行社記事	第二百八十二、三號	仝	偕行社
令德	第四卷第二、三號	仝	令德會本部
婦人世界	第八、九號	大阪	浪華婦人會
裏錦	第百十二號	東京	尙絅社
東京經濟雜誌	第千百十八、九、廿號	仝	經濟雜誌社
高知教育雜誌	第百十八號	高知	高知縣教育會
國のはな	三卷第一號	香川	國風會
女子學藝講義	一期二卷	東京	女子學藝講習會
体育	第九十九號	仝	日本体育會
紀伊教育	第百八號	和歌山	和歌山教育會
六合雜誌	第三百五十四號	東京	ゆにてりあん弘道會
上越教育會雜誌	第二號	新潟	上越教育會
京都府教育會	第百十九號	京都	京都府教育會
教育時論	第六百八、九、十號	東京	開發社
女子之友	第百十一、二號	東京	東洋社
商家之友	第一號	仝	時事新聞社
小天地	第三卷第三號	大阪	文淵堂
文藝界	第一號	東京	金港堂
新聲		仝	新聲社
家庭之新風味		仝	內外出版協會
婦女新聞	第九十九、百號	仝	婦女新聞社
大福帳	第八號	名古屋	丹心館
眞信の話集		愛知	眞信會
むさしの	第三號	東京	東洋文學會
兵事雜誌	七十六號	仝	兵事雜誌社

女鑑歌文月次兼題

五月五日　　四月廿四日〆切
歌　鏡
文　暮春の感

五月廿日　　五月九日〆切
歌　新樹
文　出產を賀する文

六月五日　　五月廿四日〆切
歌　窓螢
文　郭公をきゝて

懸賞

天には三冊（一月半分）　地には二冊（一月分）　人には一冊を贈呈す

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題	住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題	住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○總て書式に違ひたるは沒書とす。
○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。
○兼題を天地人の三才に分つ

男爵 高崎正風序
本居豐穎序
故富士谷御杖述

土佐日記燈

菊版大和綴優美全三冊
自一卷至八卷紙數壹千百頁

定價金壹圓五拾錢

郵送料〔四轄郡區三十錢○小包十里迄七錢○百里迄十二錢○百里以外廿四錢〕

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりし故今更にいはず其ものせられし著書おほかるが中に燈といふものゝ古事記燈萬葉集燈は翁か在世の頃に刻り卷となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の栗田の宮の御はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくも、なくて翁はみまかれしかは、さながらに埋もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元彦ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にて、摺り卷にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらず、土佐の守に任されしを深く慨る由ありて、あらはには女のものせしさまになし深き心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からざる最良書なり

發行所 東京築地二丁目 株式會社 國光社出版部

井上頼圀校訂　小澤政胤編著

慶長以來國學家畧傳

洋裝全壹冊
八百五拾頁
總クロース美本
定價壹圓五拾錢
郵稅十里以內七錢百里以內十二錢百里以外廿四錢

深く國學者の傳記を集めたる書は僅に徴細なる古學小傳の類に過ぎず徳川時代文學史の研究に不便少からざりしを著者小澤氏從來概して前後**十年間諸書**を**參照**し遂に本書を大成せられたり著者は尙之に滿足せずして略傳と名づけられたれど其實今**日**に於ては**最**も**完備**したる**國學者**の**傳記**なり載する所は慶長以來明治二十八年までの有職故實家神道家語學者文人歌人等**五百四十名**名人の末には**其**の**著書目錄**をかげかつ引用書目を明示したり或は之れを**國學者人名辭書**ともいふべくまた**列傳体國學史**とも稱すべし卷初にはイロハ分**索引**ありて搜索に便じ**國學傳結系譜**ありて各學者の學統を一目に見るべく**國學者年表**ありて一見各時代の學者を數ふべし殊に斯學の老大家**井上頼圀先生**は[illegible]嚀自ら**校訂**の勞を執られたれば其正確なることと根據ある他書の比にあらず本書一たび出でゝ國文學研究者は**暗夜**に**電燈**を得たるの思ひあらん**師範**學校**中**學校高等**女學校**其他**各種**の**學校**に於ては無二の**參考用書**たるべく殊に**文部省檢定受驗者**は必ず一本を座右に備へざるべからず

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社出版部

日本教育

從來教育に關する學術的の解説及訓練管理の細目の詳述したる著書は多けれども**國家の特性**本質に鑑みて**國民養成の大綱**を示せるものは甚乏しきが如し**本書**は此の**缺乏**を補はむが為に**我が日本の教育**といふことにつきて論述せるものにして當今教育界に於ける諸國**流行の寄せ集め**の弊を矯め以て**邦家**千歳の**教育主義**を明にせむとするものなり

菊版全一冊
定價郵税共 金貳拾五錢
郵券代用一割增

豪吟集

寸珍美本
定價金八錢
郵税金二錢

本集は千葉縣師範學校長弘田正郎氏が現今學生の薄志弱行を歎じプラトン以來の教育風に倣ひ本邦詩歌の中にて萃中の萃を拔いて編著せしものなり今の青年社會勉學の餘暇一本を坐右に置き時に豪吟せば豈ドヽ一ストライキ節を唱ふるに勝る萬々なるを疑はず

發行所
東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地
株式會社 國光社出版部

杉谷正隆編

家庭歌訓 修身百首 全

菊版美本 全一冊

定價金貳拾錢 郵税金四錢 郵劵代用一割增

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

發行所 東京築地二丁目 株式會社 國光社出版部

山崎忠和君著

日露の英雄

●新刊廣告●

露國の彼得大帝と我朝の德川齊昭島津齊彬とは其識見事業の世界的なる處同一なり其帝たり侯たり事功の成否の如きは別問題とすべし今此の三大英雄の性行經歷に就て細かに觀察すれば識慮の深遠なる意氣の雄偉なる機略の豁大なる未だ嘗て其の間に甚しき軒輕あるを見ず但其成功と否とは境遇に順逆ありしのみ之を以て三大英雄を輕重する如きは眞に皮相の見なりと言ふもの是れ本書の著者が立論の骨子なり著者燃犀の史眼を以て東西幾百巻の史傳を看破し以て此の書を爲す三大英雄の音容動作眼前に現れ出でゝ宛も活動寫眞を見るが如し愈四月廿日を以て發刊す大方有爲の諸君一讀して萬古の心胸を開拓し一世の智勇を推倒するの志氣を養成せられんことを望む

●洋裝四六版　三大英雄寫眞銅版挿入　定價郵稅共金貳拾貳錢

發兌元　東京京橋區築地貳丁目（電話新橋二六九三）　國光社出版部

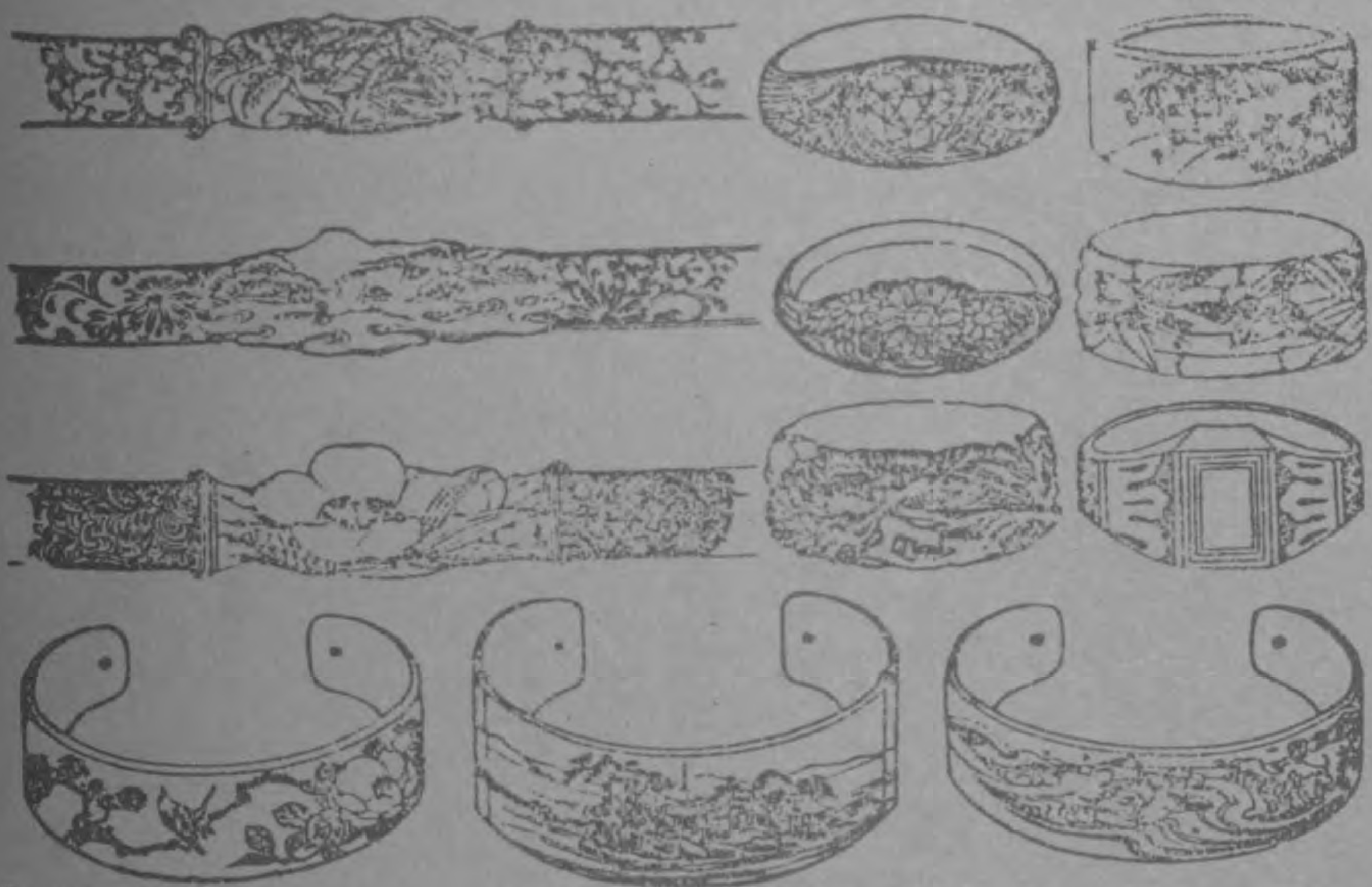
女鑑

明治廿五年三月十二日 第三種郵便物認可

毎月二回五日廿日發行 第貳百五拾壹號

明治三十五年四月廿日發行

吉沼製作品



金製指環

十八金二匁五分付片切彫
甲價 十六圓
乙價 十四圓

廿金三匁付平象嵌片切彫
甲價 廿二圓
乙價 十九圓

廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價 廿六圓
乙價 廿三圓

廿二金三匁五分薄肉象嵌
甲價 卅四圓
乙價 廿九圓

廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價 卅六圓
乙價 卅一圓

廿二金三匁五分厚肉象嵌
甲價 卅八圓
乙價 卅二圓

廿二金三匁五分肉彫象嵌
ダイヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓

廿金三匁付角小判形無地印指環
十五圓七十錢

廿二金四匁付角小判形無地印兩指環
廿二圓四十錢

十八金五匁付角小判形無地印
同指環
廿九圓五十錢

外ニ段付模樣付形狀ノ諸品ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

十八金製高彫極珍緻細付
甲價 卅五圓
乙價 三十一圓
丙價 廿七圓
丁價 廿三圓
戊價 十九圓
巳價 十六圓

金製根掛

十八金一匁五分付片切彫刻
甲價 十一圓
乙價 九圓三十錢

廿金二匁付片切彫刻
甲價 十四圓五十錢
乙價 十二圓六十錢

廿二金二匁五分片切彫刻
甲價 十九圓
乙價 十七圓

十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢

廿金三匁付蝶番付三ツ平象嵌片彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

右の外金類の多少寶石の大小又に彫刻の繁簡緒品により代價に高低の品あり

東京築地貳丁目株式會社秀英舍[illegible]印刷部印刷